

第5章 総括

第1節 遺構

(1) 調査遺構の時代変遷について

今回の下田南遺跡の発掘調査では、本遺跡が古墳時代～中世にいたる複合遺跡であることが判明した。古墳時代中期（5世紀）から集落としての営みが開始され、古墳時代後期（6世紀）から飛鳥時代（7世紀）・奈良時代（8世紀）にかけて、郡家・官衙遺跡の特徴や性格を窺い知ることができる遺構や遺物が出土し、この時期に集落の規模が大きく発展した状況が窺えた。

今回の調査で出土した遺構の時代変遷については、出土した遺物の年代観を中心に下田南Ⅰ期～Ⅷ期の8時期に設定して、その変遷の過程についてまとめたい（5-図1、附図1～8）。

【下田南Ⅰ期】（附図1）

Ⅰ期は、弥生時代～古墳時代前期（2～4世紀）である。本遺跡の黎明期といえる。調査区全体の東側に、わずかながらではあるが遺構が集中する。代表的な遺構は2d区SD062、2e区2面SD118、1e区2面SX055などで、溝を中心とするが、1e区2面SP066のように溝以外の遺構も確認できている。位置関係から、2e区2面SD118と1e区2面SX055は一体の溝であった可能性も考えられる。遺構の状況からは、本時期の集落は、今回の調査区外の北東側にかけて存在した可能性が予測できるが、詳らかではない。

【下田南Ⅱ期】（附図2）

Ⅱ期は、古墳時代中期（5世紀）である。本遺跡で集落の営みが始まった時期で、萌芽期といえる。調査区全体の中央南側、2c区を中心にわずかながらではあるが遺構が集中して確認できた。代表的な遺構は2c区SI1000、2c区SK767、2c区SK771などで、竪穴建物や土坑などが確認されている。竪穴建物の東側に位置する2c区SK767は土師器焼成遺構、2c区SK771は土器の廃棄土坑と考えられ、本遺跡で集落としての生活の営みが開始されたことが窺える。調査区外の南側にかけて集落が展開していた可能性が考えられるが、南側には中世以前の旧五条川が位置していたことも想定でき、本時期の旧五条川の流路がどの位置にあったのかは不明であるが、集落の展開があったとしても中世以前の旧五条川との間のわずかな範囲で営まれていたことも想定できる。

【下田南Ⅲ期】（附図3）

Ⅲ期は、古墳時代後期～飛鳥時代前半（6～7世紀中頃）である。本遺跡で集落の営みが急激に成長した時期で、成長期といえる。調査区東側の全体にかけて湾曲しながら東～北西に並走する数条の溝（2e区2面SD130など）や、調査区中央～北側にかけて屈折や湾曲しながら東～北西に向かって延びる溝（2a区2面SD166など）などが確認でき、その南～西側に位置する2b区ないしは1c区を中心に、竪穴建物が数多く確認できた。この竪穴建物群の配置は、調査区の西側で確認できた1c区SD527によって東西に分断されていた可能性も考えられる。本時期の建物については、竪穴建物に比べるとわずかではあるが掘立柱建物も確認でき、2b区SB011のような側柱構造のもののほかに、小規模ではあるがRa区SB002やRa区SB003、Rc区SB003のように総柱構造の建物が出現する。また本時期については、建物の主軸方向に特色を窺い知ることができる。東西南北の正方位に建物主軸方向が合わず、竪穴建物では1a区SI067・1c区SI169・2b区SI257など、掘立柱建物では2b区SB011・Ra区SB002・Ra区SB003・Rc区SB003などのように、北西

～南東に建物主軸方向を向ける傾向が窺える。1 b 区 S I 230 や 2 b 区 S I 372 のように、一部には建物の長軸を北東～南西に取るものが含まれる。本時期の建物の中心は竪穴建物で、平面方形の建物主軸方向を北西～南東に配置する傾向がある。建物主軸方向を東西南北の正方位に取る竪穴建物の 1 c 区 S I 251・1 c 区 S I 226 などは、Ⅲ期の末頃（7 世紀中頃）と考えられ、Ⅲ期～Ⅳ期への過渡期に位置づけられる。

【下田南Ⅳ期】（附図 4）

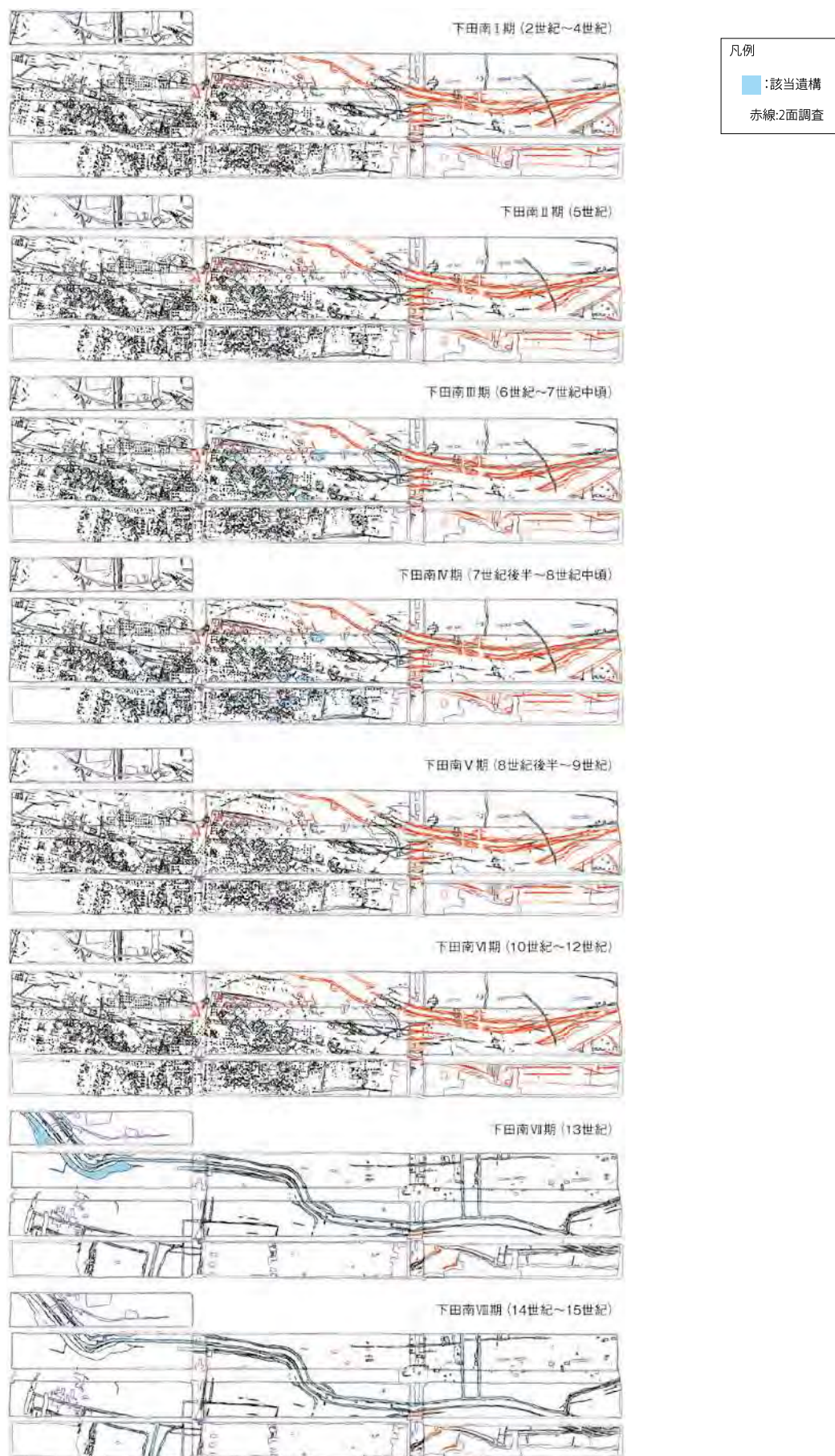
Ⅳ期は、飛鳥時代後半～奈良時代前半（7 世紀後半～8 世紀中頃）である。本遺跡で集落の営みが最盛となった時期で、全盛期といえる。Ⅲ期に引き続き竪穴建物が構築され、Ⅲ期に比べると竪穴建物の棟数は減少するが、調査区南側で一辺 10m 以上の大型竪穴建物（1 d 区 S I 609）が見つまっている。また、際立って掘立柱建物が構築されており、1 c 区 S B 007 のように大型の四面廂付建物や、1 c 区 S B 002・1 d 区 S B 504・1 d 区 S B 511・1 d 区 S B 508・2 c 区 S B 001・R a 区 S B 004 などの側柱構造のものが見られるが、1 b 区・1 c 区・1 d 区・2 a 区 2 面・2 b 区・R a 区・R c 区・R d 区といった全調査区の中央～西側を中心に総柱構造のものが 24 棟確認されている。総柱構造の掘立柱建物には大小の規模の差はあるが、その大半が穀物類などの倉庫と考えられ、特に整然と並ぶ 1 b 区 S B 005・1 b 区 S B 007・1 b 区 S B 010・R a 区 S B 008（1 b 区 S B 008）・R a 区 S B 001 の 5 棟の倉庫群は「正倉」と考えられ、微高地を選んで構築されている。また本時期の建物の特色として、建物方向が東西南北の正方位に近づく傾向が窺える。竪穴建物の 2 b 区 S I 258・2 b 区 S I 257 のように北西～南東に建物主軸方向を向けるものは、Ⅲ期の要素が残るものと考えられ、Ⅳ期の初頭（7 世紀後半）、Ⅲ期～Ⅳ期への過渡期に位置づけられる。また 1 b 区 S B 005・1 b 区 S B 007・1 b 区 S B 010・R a 区 S B 008（1 b 区 S B 008）・R a 区 S B 001 の倉庫群の南には西～南東に延びる 1 b 区 S D 042（R a 区 S D 101）や R a 区 S D 001（1 c 区 S D 527）・1 c 区 S D 512 といった溝が掘削されている。また調査区東側で東西に真っすぐ延びる道路状遺構（1 e 区 2 面 S D 039・1 e 区 2 面 S D 050）も本期に位置づけられ、調査区外の東側に位置する薬師堂廃寺跡（飛鳥～奈良・平安時代、以下、本章では他の廃寺との比較呼称として「川井薬師堂廃寺」と記す）と本遺跡との関連が想定される。本時期は、官稲を収納した正倉と考えられる倉庫群や大型の竪穴建物や四面廂付建物の存在から、地方の郡家（評家）としての要素が色濃く窺え、郡を構成した郷の中心となる場所のひとつであった可能性が高い。

【下田南Ⅴ期】（附図 5）

Ⅴ期は、奈良時代後半～平安時代初頭（8 世紀後半～9 世紀）である。本遺跡で集落の営みが極端に減少する時期で、減少期といえる。本遺跡では、Ⅲ期に集落が定着し、Ⅳ期に正倉などを配置する地方郡家（評家）的要素が色濃くなるが、本期になると極端に集落としての機能が減少して、Ⅱ期の様相に戻るような遺構配置となる。調査区全体の中央南側、2 b 区・2 c 区を中心にわずかながらではあるが遺構が集中する。代表的な遺構は 2 c 区 S I 018・2 c 区 S I 117・2 c 区 S I 447、2 b 区 S B 004・2 b 区 S B 010 などで、竪穴建物と掘立柱建物などである。また東側の 1 e 区 2 面 S D 042 も本期に相当する遺構である。

【下田南Ⅵ期】（附図 6）

Ⅵ期は、平安時代前半～後半（10～12 世紀）である。本遺跡で集落の営みが衰退する時期で、衰退期といえる。Ⅴ期に営まれていた集落は途絶え、Ⅰ期よりも遺構数が減少する。調査区西側の 1 b 区～1 c 区へと南北に続く一体の溝である 1 b 区 S D 128・1 c 区 S D 181・R a 区 S D 097、Ⅴ期から引き続き東側の 1 e 区 2 面 S D 042 も本期に入っても機能していたことが想定される。



5-図1 下田南遺跡Ⅰ～Ⅶ期変遷図

【下田南Ⅶ期】（附図7）

Ⅶ期は、中世に入り鎌倉時代（13世紀）である。本遺跡で集落の営みが再興する時期で、再興Ⅰ期といえる。Ⅶ期に入ると、調査区全体を北西～東に向かって延びる数条の溝（2 a区1面S D001・2 a区1面S D002など）や、調査区東側で南北に延びる溝（2 d区S D022・2 d区S D047）など多くの溝が確認できた。特に調査区中央～西側の南で確認できた1 c区S D061・1 d区S D075・1 d区S D551、1 d区S D201・1 d区S D254、1 c区S D693・1 d区S D502・2 b区S D219・2 c区S D693・R c区S D063はそれぞれが一体となる大型の平面が方形となる溝で、屋敷を区画した屋敷溝である可能性が高い。調査区中央～西側の南では、旧五条川との間にて屋敷が配置されていたことが想定される。

【下田南Ⅷ期】（附図8）

Ⅷ期は、室町時代（14～15世紀）である。Ⅶ期からの継続となる時期で、再興Ⅱ期といえる。Ⅷ期では、基本的にⅦ期の遺構が継続するが、Ⅷ期の特色として調査区中央～東側の北を中心に方形土坑の配置が開始される。代表的な方形土坑は、2 b区S K017・2 d区S K018・2 d区S K107・R e区1面S K006・R g区1面S K027などである。本期に相当する土坑は27基確認されている。

（基峰）

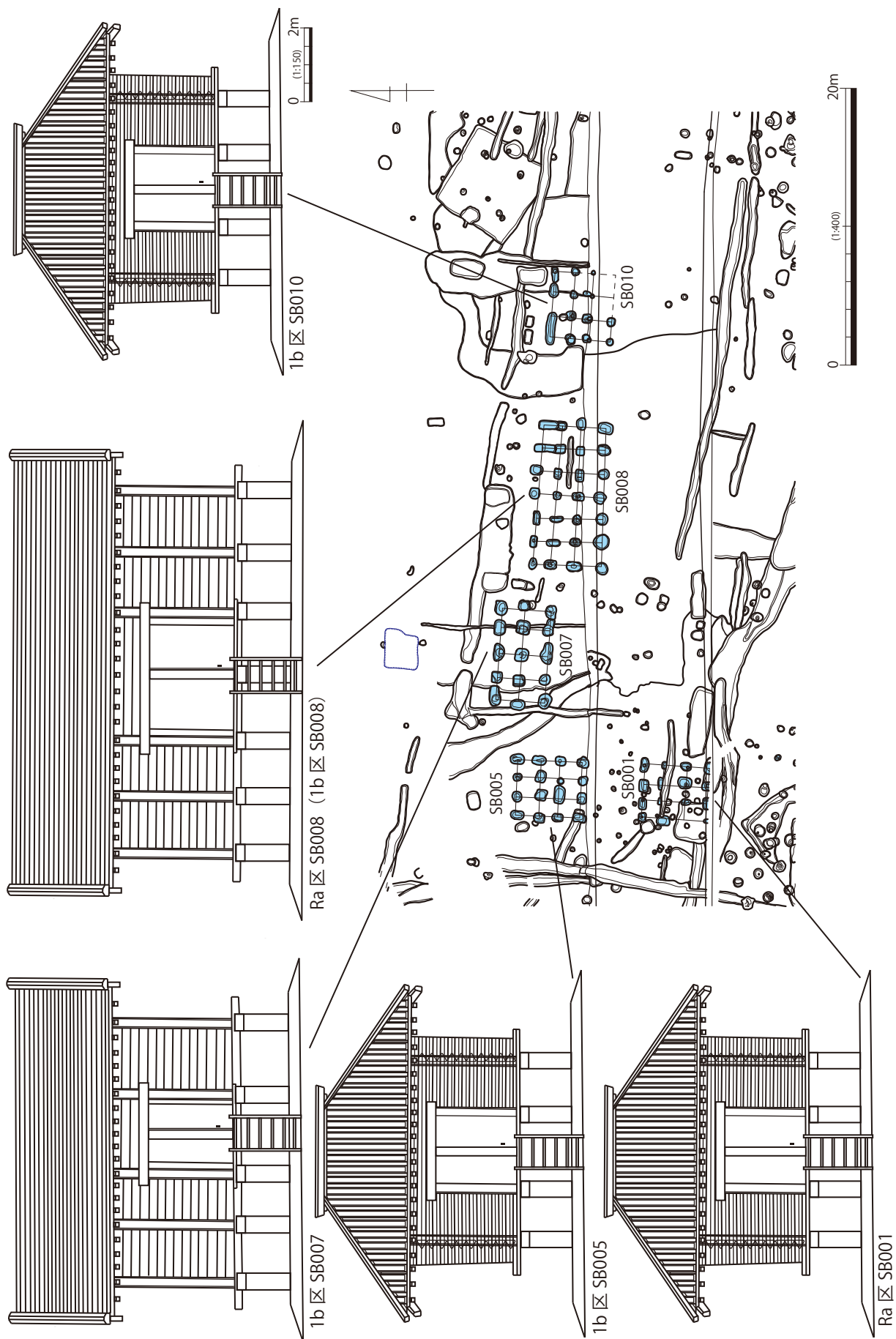
（2）1 b区・R a区に位置する古代倉庫群について

下田南Ⅳ期に営まれた1 b区S B005・1 b区S B007・1 b区S B010、R a区S B008（1 b区S B008）・R a区S B001の5棟の総柱構造の掘立柱建物は、北列と西列の組み合わせによって平面「鉤」状に整然と配置されていた。いずれも高床建築の倉庫と考えられ、7世紀後半～8世紀中頃にかけて、大中規模の倉庫群が形成されていたと考えられる。

中心となる高床建物はR a区S B008（1 b区S B008）で、西隣に位置する1 b区S B007とともに形状から長倉（横倉）と推定でき、上屋部は切妻屋根であったことが想像できる。1 b区S B005・1 b区S B010・R a区S B001の3棟は、形状がほぼ正方形となる倉で、上屋部は寄棟屋根ないしは切妻屋根であった可能性も考えられる。本倉庫群の側壁構造は不明であるが、板倉ないしは校倉（甲倉）などの造りであったことが想像できる（5－図2）。また何を収納していたのかは不明であるが、本倉庫群の南東には広場空間（建物の存在しない空間）が広がることや、その先の南東約20mの位置に大型の四面廂付建物である1 c区S B007、さらにその南約15mの位置に大型の竪穴建物である1 d区S I 609が存在することから、広場空間は「庭」、1 c区S B007は「官舎」（曹司）、1 d区S I 609は「厨」とも想定でき、これらの大型建物の配置とともに、倉庫群が整然と規格的に配置された状況からは、本倉庫群が官稲などを収納した「正倉」であったと想像できる（5－図3）。

地方郡家（評家）の正倉建築では、8世紀中頃までは礎石建物ではなく掘立柱建物が主体で、側柱構造のものも含まれるが、総柱構造の高床倉庫が中心で、面積25㎡未満の一般集落の高床建物（掘立柱建物）に比べて、正倉の特徴は4間×3間程度のものがその中核をなし、面積25～60㎡未満の中型の倉や、面積60～100㎡の大型の倉が占めることが指摘されてきた（山中敏史1994、p.133）。本倉庫群は、中核をなすR a区S B008（1 b区S B008）が6間×3間で面積61.60㎡、1 b区S B007が4間×2間で面積35.20㎡、その他の1 b区S B005が3間×3間で面積29.93㎡、1 b区S B010が3間×3間で面積27.12㎡、R a区S B001が3間×3間で推定面積24.91㎡を測り、大型の倉1棟と中型の倉4棟から構成され、地方郡家の正倉の要件を十分に満たしている。

本倉庫群が営まれた時期よりやや時代が下るが、『令義解』に「几倉、皆於高燥処置之。側開池渠。



5－図2 1b区・Ra区古代倉庫群の配置と復元想定 [倉庫復元図：岡部町教委1997、図版1・6を参考に作成]

去倉五十丈内、不得置館舍。」という記述が見られ、大宝令・養老令の倉庫令では、倉庫設置の条件として、高燥の土地であること、防火用の池・溝の設置、50丈（約150m）以内に他の建物を置くことを禁止していたことが窺い知れる。さらに平安時代まで下ると、『類聚三代格』に「応_レ建_二置倉院_一事」として「右被_二右大臣宣_一。併。奉勅。如_レ聞諸国建_二郡倉_一元置_二一_レ処_一。百姓之居去_レ郡僻遠、跋_二涉山川_一有_レ勞_二治貢_一。加以倉舍比近薨宇相接、一倉失_レ火百倉共焼。言念_二其弊_一、有_レ損_二公私_一。宣須_下每_レ郷更置_二一_レ院_一以濟_二百姓_一兼絶_中火祥_上。始_レ自_二今年_一所_レ輸租税収_二納新院_一。但前所_レ納_二郡家_一不_レ動物者、依_レ旧莫_レ動、其用尽倉者漸遷_二新院_一。置_レ倉之法一依_二延暦十年符_一、各相去十丈、量_レ便置_レ之。」という延暦14年7月15日の記述があり、延暦14（797）年7月以降に、正倉を郷ごとに設置するよう定めている。山中敏史氏は、郷に設置された倉を郷倉（山中敏史1994、p.152）と呼称している。平安時代に下るが『和名類聚抄』の尾張国丹羽郡の記述からは、「吾鬘_{（あずら）}、稻木_{（いなぎ）}、上春_{（かみはる）}、丹羽_{（にわ）}、穂積_{（ほづみ）}、大桑_{（おおくわ）}、下沼_{（しもつぬ）}、上沼_{（かみつぬ）}、前刀_{（さきと）}、小弓_{（おゆみ）}、小野_{（おの）}、小口_{（おぐち）}」の12郷の名称を窺い知ることができ、現在の岩倉市域は上春郷に属した可能性が指摘されている（一の丸出版1992、p.62）。

本遺跡は旧五条川右岸の堤防上に立地し、今回の調査では本倉庫群は堤防上の微高地に構築されていたことが判明しており、その南に隣接して西～南東に延びる1 b区S D042（R a区S D101）やR a区S D001（1 c区S D527）・1 c区S D512といった同時期の溝が確認されている。前述の通り、本倉庫群の南東には東西約60m×南北20mほどではあるが広場空間（建物の存在しない空間）が広がり庭と想定され、本倉庫群の西～北東にかけては約100mに及ぶ建物の存在しない空間が広がることが確認されている。1 b区・R a区に位置する古代本倉庫群は、まさに倉庫令に相当する造営立地に準じている。

また全国の発掘調査によって、地方各国の郡に置かれた正倉の実態は地方社会に応じて多様であることがわかっており、周辺では古代美濃国の武義郡家である弥勒寺遺跡群（岐阜県関市・弥勒寺東遺跡と弥勒寺跡）や古代遠江国の敷智郡家である伊場遺跡（静岡県浜松市）がよく知られる。遠方では古代武蔵国の榛沢郡家である中宿遺跡（埼玉県深谷市）、同国の橘樹郡家である橘樹官衙遺跡群（神奈川県川崎市・千歳伊勢山台遺跡と影向寺廃寺）、同国都筑郡家である長者原遺跡（神奈川県横浜市）などがよく知られている。いずれも飛鳥～平安時代（7～10世紀）にいたる官衙遺跡で、郡家と地方寺院が近接して発掘されている事例が多く、郡家の周辺に寺院があることは一般化した現象といえ（5－表1）、本遺跡と川井薬師堂廃寺との関係を彷彿とさせる。

このことから、本遺跡にて地方の郡家（ないしは評家）としての要素を色濃く窺うことができるが、本遺跡から郡庁に相当する遺構の存在や、調査区外に目を向けても周辺に郡庁に相当する場所は無いものと考えられ、郡域を考慮しても本遺跡が郡家（ないしは評家）であることは考え難い。丹羽郡の郡家（評家）については、「小折」の地名からも江南市小折地区周辺がその所在地として重視されており（赤塚次郎2001、p.61）、郡家（評家）周辺寺院として長福寺廃寺の存在が知られている。よって、本遺跡は古代尾張国の丹羽郡に置かれた郷の中心となる施設（場所）で、所謂「郡家の出先機関と推定される地方官衙遺跡の一部」（佐藤信2007、pp.77-81）と考えられる。下田南Ⅳ期の様相は、まさに佐藤信（2007、p.81）が指摘するように、地方の郡では「伝統的な単一の郡司氏族が一元的に郡内支配を行っていたというよりも、複数の有力者からなる郡司層による郡司交替が頻繁に行われていた」というような地方社会の多元的な構造を反映しているものと思われる。本倉庫群については、古代出雲国の意宇郡山代郷に設置された正倉と同様に、丹羽郡にて前進的に正倉を分散して主要な郷に設置した可能性があったことも考えておきたい。

（基峰）



5－図3 1b区・Ra区古代倉庫群の想像図〔服部仁実画：2022年制作〕

国 郡	評・郡家遺構	周 辺 寺 院	寺院の現在地／備考
山背国久世郡 河内国安宿郡 摂津国島上郡	正道官衙遺跡 円明遺跡 郡家川西遺跡	久世維持 ☆円明廃寺 芥川廃寺	京都府城陽市寺田正道 大阪府摂津市円明／墨書土器「安宿寺」「安寺」 大阪府高槻市郡家新町
駿河国富士郡 甲斐国山梨郡 相模国高座郡 相模国足下郡 上総国武射郡 下総国埴生郡 常陸国新治郡 常陸国那珂郡 常陸国茨城郡 常陸国筑波郡 常陸国鹿嶋郡 常陸国河内郡	東平遺跡？ (国府関連遺跡) 西方遺跡 下曾我遺跡 鳴戸東遺跡 大畑Ⅰ遺跡 古郡遺跡 台渡里遺跡 外城遺跡 平沢官衙遺跡 神野向遺跡 金田西遺跡	三日月廃寺 寺本廃寺 下寺尾廃寺 千代廃寺 ☆真行寺廃寺 龍角寺廃寺 ☆新治廃寺 ☆台渡里廃寺 ☆茨城廃寺 北条中台廃寺 (鹿島神宮寺跡) 九重東岡廃寺	静岡県富士市伝法三日月／定額寺「法照寺」 山梨県笛吹市春日居町 神奈川県茅ヶ崎市下寺尾 神奈川県小田原市千代 千葉県山武市／墨書土器「武射寺」(9C後半)・「大寺」 千葉県栄町龍角寺 茨城県筑西市久地楽／文字瓦「新治寺」(8C後半)・「大寺」 茨城県水戸市／墨書土器「仲寺」(9C後半)・文字瓦ヘラ「徳輪寺」 茨城県石岡市貝地／墨書土器「茨木寺」・「茨寺」(9C後半～) 茨城県つくば市平沢 茨城県鹿嶋市宮中鹿島山(前身寺院を別に求めるべき) 茨城県つくば市東岡／金田西遺跡に墨書土器「寺」
近江国栗太郡 美濃国武義郡 信濃国埴科郡 上野国佐位郡 上野国新田郡 武蔵国橘樹郡 武蔵国都筑郡 武蔵国幡羅郡 武蔵国榛澤郡 下野国那須郡 下野国芳賀郡 陸奥国名取郡 陸奥国賀美郡 陸奥国安達郡 陸奥国行方郡 陸奥国磐城郡 陸奥国信夫郡 陸奥国白河郡	岡遺跡 弥勒寺東遺跡 大境遺跡 三軒屋遺跡 天良七道遺跡 千歳伊勢山台遺跡 長者原遺跡 幡羅遺跡 中宿遺跡 梅曾遺跡 塔法田遺跡 郡山遺跡 東山官衙遺跡 郡山台遺跡 泉官衙遺跡 根岸遺跡 北五老内遺跡 間和久遺跡	(☆霊山寺遺跡) 弥勒寺跡 雨宮廃寺 上植木廃寺 寺井廃寺 影向寺廃寺 (排堂廃寺) 西別府廃寺 岡廃寺 浄法寺廃寺 大内廃寺 郡山廃寺 葉切谷寺廃寺 郡山台遺跡 植松廃寺 夏井廃寺 勝浜廃寺 借宿廃寺	滋賀県栗東市目川・岡・下戸山／『西宮記』に栗太寺 岐阜県関市池尻／墨書土器「大寺」 長野県千曲市雨宮／定額寺「屋代寺」 群馬県伊勢崎市長植木本町ほか／刻印文字瓦「佐位」 群馬県太田市天良町 神奈川県川崎市高津区千年／文字瓦「无射志国荏原評」 神奈川県横浜市緑区荏田町 埼玉県熊谷市西別府 埼玉県熊谷市中宿 栃木県那須郡那珂川町浄法寺 栃木県真岡市京和泉 宮城県仙台市太白区郡山 ※城柵とすべきか 宮城県加美町葉切谷 ※城柵との関係要検討 福島県二本松市郡山台／安達郡は延喜六年に成立 福島県南相馬市原町区 福島県いわき市平下大越石田 福島県福島市霞浜町・浜田町 福島県白河市借宿
因幡国八上郡 因幡国気多郡 伯耆国八橋郡 美作国久米郡 備中国英賀郡 備後国三谷寺	万代寺遺跡 上原遺跡 大高野遺跡 宮尾遺跡 小殿遺跡 下本谷遺跡	土師百井廃寺 寺内廃寺 斎尾廃寺 久米廃寺 英賀廃寺 ☆寺町廃寺	鳥取県八頭町土師百井 鳥取県鳥取市鹿野町寺内 鳥取県琴浦町槻下 岡山県津山市宮尾(旧久米郡久米町) 岡山県真庭市上水田 広島県三次市向江田町／『日本霊異記』『三谷寺』
伊予国久米郡 筑前国上座郡 筑後国御原郡 豊前国上毛郡 豊前国下毛郡 肥後国託麻郡 肥後国玉名郡	久米高畑遺跡 井出野遺跡 小郡遺跡 大ノ瀬下大坪遺跡 長者屋敷官衙遺跡 水前寺廃寺 立願寺遺跡	☆米住廃寺 長安寺廃寺 上岩田廃寺 垂水廃寺 相原廃寺 水前寺廃寺 立願寺廃寺	愛媛県松山市米住町 伊予国風土記逸文に「久米寺」 福岡県朝倉市須川／墨書土器「大寺」「知識」 福岡県小郡市上岩田／別に井上廃寺・下高橋官衙遺跡 福岡県築上郡上毛町 大分県中津市相原 熊本県熊本市出水町・神水町 熊本県玉名市立願寺
上総国望陀郡 上総国匝瑳郡 上総国市原郡 上野国群馬郡 武蔵国足立郡 伯耆国久米郡 備中国都宇郡	(未確認・未確定) (未確認・未確定) (未確認・未確定) (未確認・未確定) (未確認・未確定) (未確認・未確定) (未確認・未確定)	上総大寺廃寺 龍尾寺跡 光善寺廃寺 山王廃寺 大久保領家廃寺 ☆大御堂廃寺 惣爪廃寺	千葉県木更津市大寺 千葉県匝瑳市八日市場大寺／郡司は物部匝瑳連(『続日本後紀』) 千葉県市原市市原寺山 群馬県前橋市総社町／文字瓦「放光寺」・交替実録帳・定額寺 埼玉県さいたま市桜区大久保領家 鳥取県倉吉市／墨書土器「久米寺」(8C後半)・定額寺「道興寺」 岡山県岡山市惣爪／旧山陽道を挟んで反対側に幸利神社

評・郡家遺構は政庁域未検出も含む。官衙遺跡群内の新・旧遺跡名含む。武蔵国は東山道所屬とした。

☆は郡名寺院。斜体は郡家遺跡未確認・未確定であるが「郡寺」と想定されている主な例。

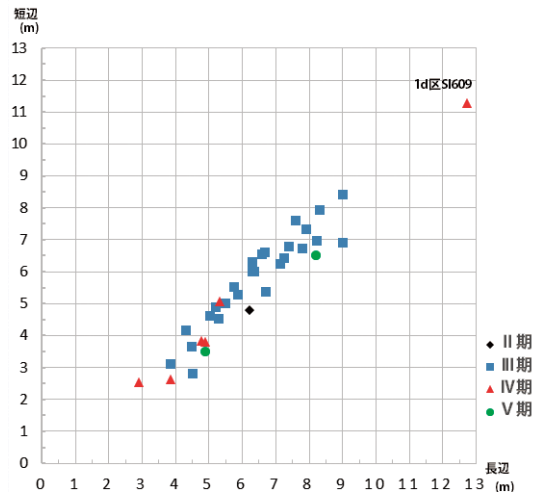
5-表1 郡家(評家)と周辺寺院[荒井秀規2017、p.18]

(3) 大型竪穴建物（1d区S I 609）について

下田南遺跡から出土した遺構の中で特筆すべきものとして、長辺12.72m、短辺11.28mを測る超大型の竪穴建物である1d区S I 609がある。本遺跡で規模が正確に判明している竪穴建物は35棟あるが、その隔絶度合いは明らかである（5－図4）。本建物は検出面からの計測で、竪穴本体で68.9㎡以上の土が掘削されており、一般的な竪穴建物の掘削土量の数倍以上となる。建物構築の際の労力と、それに見合う重量感ある立派な上屋であったことが想像できる。また本建物の立地は、官衙的施設が立ち並ぶ中に位置しており、住居というよりも来客者などをもてなす厨的施設や集会所的な役割が想像できる。

本建物は現在確認されている古代の竪穴建物では、愛知県内最大級で、近い時期の超大型竪穴建物としては、品野西遺跡S B 28（瀬戸市）、梅坪遺跡S B 529（豊田市）の例が知られる。また愛知県内ではないが、周辺地域では弥勒寺東遺跡大形竪穴建物②（岐阜県関市）がある（5－図5）。

品野西遺跡S B 28は、3棟が重なる内の2棟目として建てられたものである。品野西遺跡は交通の要所に立地し、竪穴建物周辺に四面廂付掘立柱建物や倉庫が確認されていることから、駅家などの公的機関が想定されている（瀬戸市埋文セ1997）。梅坪遺跡S B 529は、同じ位置で建て替えられた3棟の中で最も新しい建物で、その規模から「首長居館」と推測されている。梅坪遺跡は官衙遺跡とはされていないが弥生時代の環濠集落から続く拠点集落で、7世紀後半～8世紀にかけては掘立柱建物が建てられ、円面硯や銚帯金具が出土する大規模遺跡である（豊田市教委1995、永井邦仁2016）。弥勒寺東遺跡大形竪穴建物②の性格は不明であるが、周囲に掘立柱建物が立ち並ぶ中に立地する（関市教委2015）。弥勒寺東遺跡は古代美濃国武義郡衙（郡家）に比定されており、少数ではあるが近隣の例によると一辺10m前後の超大型竪穴建物には、梅坪遺跡のように前代からの住居の延長上にあるものと、下田南遺跡・品野西遺跡・弥勒寺東遺跡のように官衙的施設の一つとして建てられたものの2つの系統があるように思われる。



5－図4 下田南遺跡の竪穴建物規模

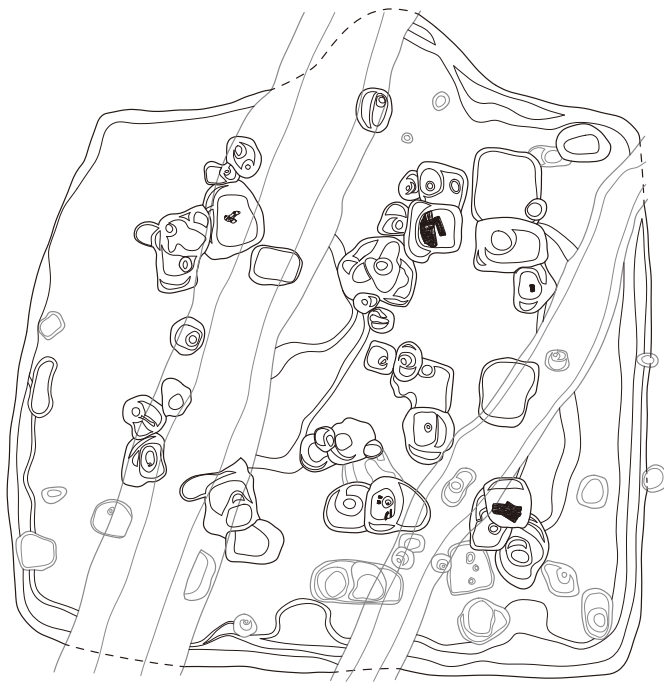
全国的に見るとこうした官衙的施設内に超大型竪穴建物が存在する事例は、主に関東・東北地方で確認されており、今回下田南遺跡でも確認されたことによって、東海地方の官衙（郡家）でも普遍的ではないにせよ存在していた可能性が考えられる。

（小島）

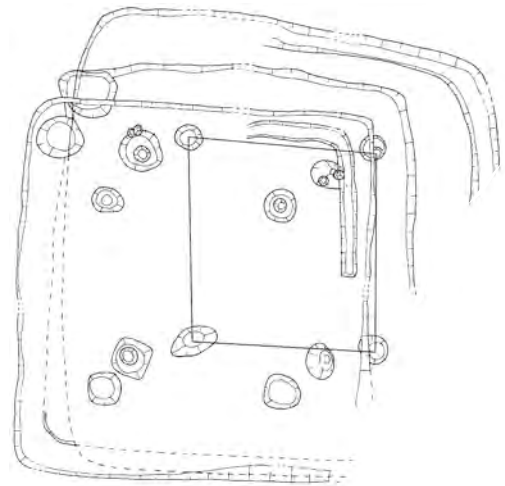
(4) 2c区古代竪穴建物の構造変遷について

2c区を事例にして、下田南Ⅳ期（Ⅲ期）～Ⅴ期にかけての竪穴建物の構造と変遷の過程について代表的な竪穴建物の様相を概観し、雑駁ではあるが本遺跡における古代竪穴建物の構造変遷の傾向の把握としたい。

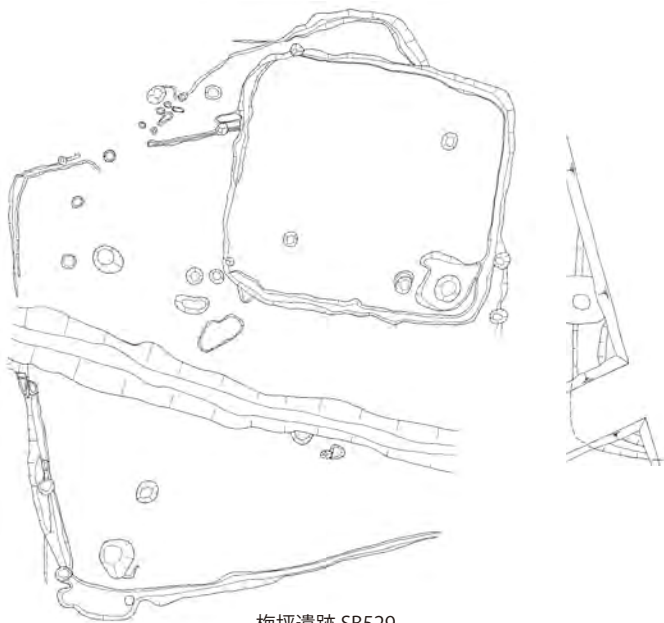
① 2c区S I 698は一辺7.60mを測る平面隅丸正方形の竪穴建物で、出土した須恵器高坏や甕から7世紀中頃の時期と考えられる。下田南Ⅲ期・Ⅳ期に分類したが、Ⅲ期の最も新しい時期～Ⅳ期の最も古い時期と考えられ、Ⅲ期～Ⅳ期の過渡期に位置づけられる。建物は4本支柱で上屋部を支持し、



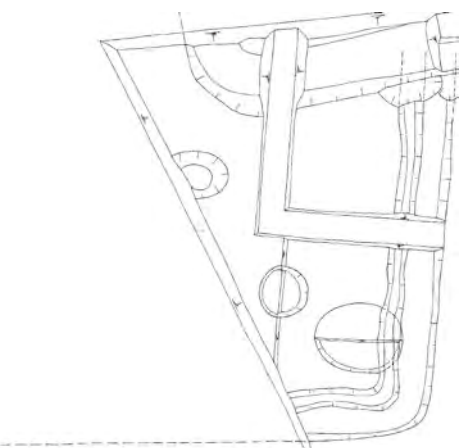
下田南遺跡 1d区 SI609



品野西遺跡 SB28



梅坪遺跡 SB529



弥勒寺東遺跡大形竪穴建物②

0 (1:150) 4m

遺跡名	遺構名	長辺	短辺	面積	火処	貯蔵穴	主柱	主な出土遺物	時期
下田南遺跡	1d区SI609	12.72	11.28	143.5	不明 (カマド)	—	4以上	須恵器:坏蓋・坏身・鉢・盤・壺、土師器:暗文土器・製塩土器、土鍾	7世紀末頃～8世紀前半
品野西遺跡	SB28	9.3	8.4	78.1	カマド	—	4	須恵器:坏蓋・高盤・長頸瓶	8世紀
梅坪遺跡	SB529	10.0	9.2	90.0	—	—	不明 (4)	須恵器:坏蓋・坏身・高坏・甕、土師器:高坏・鉢、土鍾多数、桃核	6世紀後半～7世紀前半
弥勒寺東遺跡	大形竪穴建物②	12.0	—	—	—	—	—	須恵器:坏蓋・坏身・鉢、土師器:甕・暗文土器、土鍾	7世紀後半～8世紀

()内は推定

5－図5 下田南遺跡と周辺の超大型竪穴建物 (1:150)

[品野西遺跡：瀬戸市埋文セ1997・p.33第23図、梅坪遺跡：豊田市教委1995・p.67fig.51、弥勒寺東遺跡：関市教委2015・p.65図29]

西側に出入口があったと考えられる。建物内の東壁面の内側にカマドを付設し、形状から煙道は上屋部に直に抜けていたことが想像できる。カマドの脇には貯蔵穴を有している。

②次に2c区S I 990は全長8.20m、幅6.50mの平面不整形の竪穴建物で、出土した須恵器坏や土師器甕から8世紀中頃の時期と考えられる。下田南Ⅳ期に分類したが、Ⅳ期の最も新しい時期、Ⅴ期の最も古い時期で、Ⅳ期～Ⅴ期の過渡期に位置づけられる。建物の主軸方向は正方位で、建物規模は比較的大きいが2本支柱で上屋部を支持し、南側に出入口があったと考えられる。建物内の北壁面にカマドを付設し、形状から煙道は建物外側に抜けていたことが想像できる。

③最後に2c区S I 447であるが、全長4.90m、幅3.50mの平面不整形の竪穴建物で、出土した須恵器坏や長頸瓶、土師器甕、灰釉陶器から8世紀中頃～9世紀初頭の時期と考えられる。下田南Ⅴ期に分類した典型的な竪穴建物である。建物の主軸方向は正方位で、建物規模は比較的小さいが4本支柱で上屋部を支持し、建物内の東壁面に大型カマド（双口以上）を付設する。形状から煙道は建物外側に地山を掘り抜けて突出する。貯蔵穴を有している。

雑駁ではあるが、以上の①～③が下田南Ⅳ期（Ⅲ期）～Ⅴ期にかけての2c区での古代竪穴建物の構造変遷の概要となる。

2c区S I 698はまさに本遺跡における7世紀中頃の竪穴建物の典型例といえ、次の2c区S I 990は大型建物ながら2本支柱という上屋部の構造であったことが特徴的で、本遺跡における8世紀中頃の竪穴建物の典型例といえる。最後の2c区S I 447は小型建物であるが大型カマドを有する構造で、本遺跡における9世紀初頭まで下る竪穴建物の典型例といえる。いずれもカマドの残存状態が非常に悪かったため、カマド本体の燃焼部や掛口・構築材など、詳細な規模・構造を把握することはできなかったが、カマドの煙だしにその特徴を見出すことができた。①は建物内部から上屋部に直に煙道が抜けて排煙するタイプで、併せて建物内部を燻していた可能性も考えられる。②は煙道が建物外部へと抜け出る一般的によく知られる典型的なカマドといえる。③はカマド本体が大型化し、煙道が建物外側の地山を削り抜いて長く延びるタイプで、建物から離れた位置に排煙するタイプとなる。カマドは、同一集落内においても多様性があることが知られてはいるが、2c区古代竪穴建物では単純に構造変遷の傾向を把握することができた（5-図6）。

2c区以外他地区も含めて単純に下田南Ⅲ期の竪穴建物の竪穴規模よりも、下田南Ⅳ期・Ⅴ期では竪穴規模が縮小化し、カマドが大型化していく傾向が窺える。従来から竪穴建物は、一般集落では古墳時代から平安時代へと時代が下るにつれて、竪穴規模が縮小しカマドが大型化する傾向が指摘されてきた（笹森健一2007 pp.140-145）。下田南遺跡では、1d区S I 609のような特別な竪穴建物を除くと、竪穴建物の竪穴規模とカマドについては、一般集落と同様の傾向を示すことが理解できる。

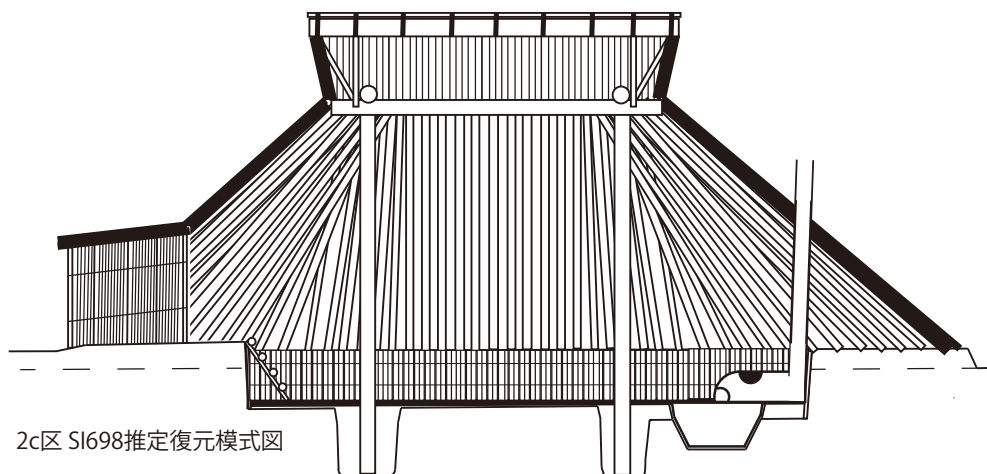
（基峰）

（5）中世の遺構について

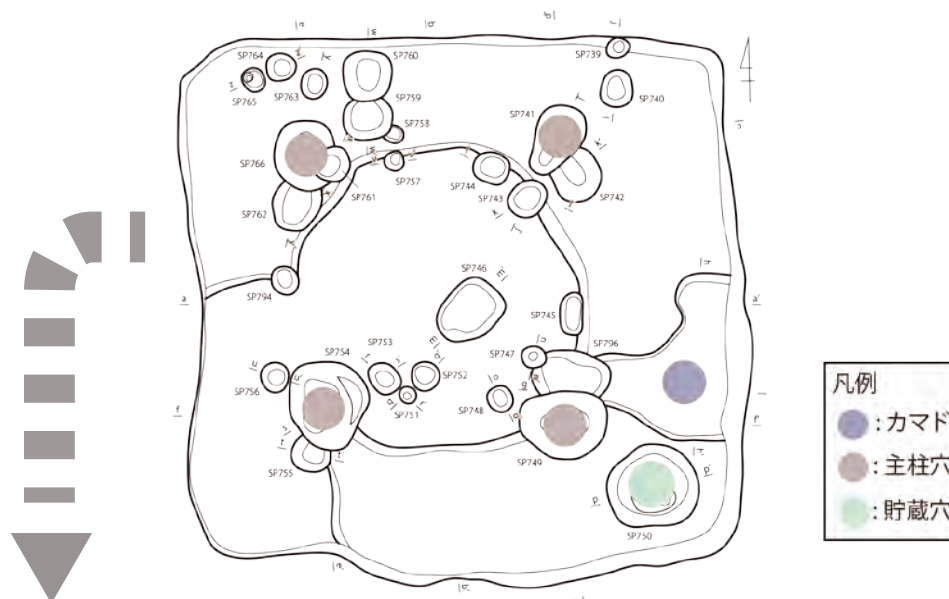
今回の下田南遺跡の発掘調査では、中世に属する建物遺構の存在は確認できなかった。

本遺跡の調査では、並走して延びる中世の溝が多く確認できた。1a区S D019は1b区・2a区1面・2b区・2e区へと連続し、1e区1面S D006まで続く長大な溝である。そのすぐ南側に並走して1a区S D018が、同様に1e区1面S D003へと続いている。調査区全域を北西～南東へと緩やかに腕曲しながら、基本東西方向へと延びている。

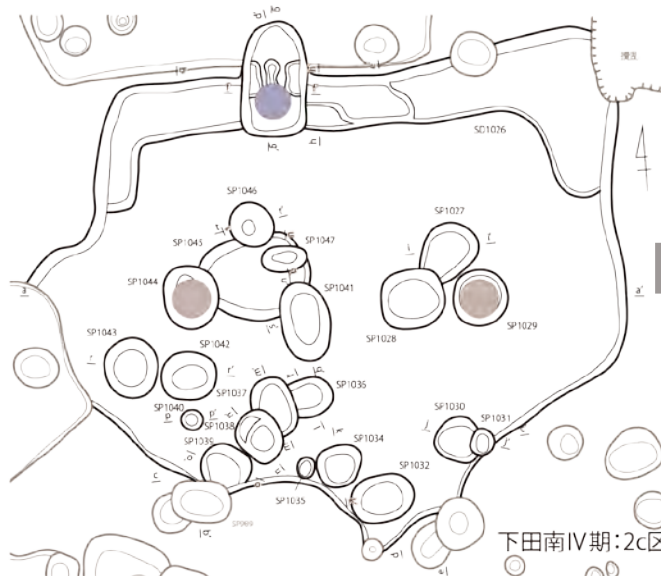
2e区1面S D030と接合して真っすぐに北へ延びる2e区1面S D094と2e区1面S D095も



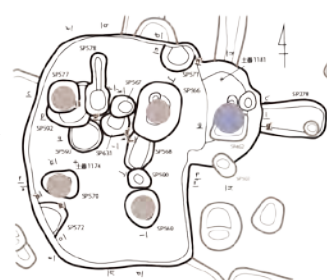
2c区 SI698推定復元模式図



下田南III期(新)~IV期(古):2c区 SI698



下田南IV期:2c区 SI990



下田南V期:2c区 SI447

5-図6 2c区古代竪穴建物の構造変遷



5－図版1 岩倉土地整理図 川井村之図：下田南全図（1 a 区・1 b 区を含む）

〔北が上になるように天地入れ替え、中央の斜めに走る道が5－図版2の中央の道に続く、岩倉市提供〕

並走する溝で、2 d 区に入っても同様に北へ向かって延びている。

これらの並走する溝からは、山茶碗などの中世に属する遺物が多く出土しており、掘削された時期や法量に新旧差はないといえる。このように並走する2条の溝は、近接する伝法寺野田遺跡（一宮市）でも確認されており、溝の埋土中からは山茶碗を中心とした中世の陶器類が出土している（愛知県埋文セ2007、p.78）。本遺跡で確認できた並走する中世の溝については、灌漑用水路とも考えられるが、並走する2条を一对とし、その間を道路として利用されていた可能性が考えられる。道路側溝の役割を兼ねた灌漑用水路と思われる。時期によっては、用途に変化があったと思われる、『岩倉土地整理図』（岩倉市提供）によれば、該当地区に、同様な経路をたどる道路（畦道）が記されている（5－図版1・2）。

また、1 a 区 S D019の北側を沿うように伸びる攪乱の筋道には、両側に土留めが施されていたことから、近世以降の畦道の名残りであろう。



5－図版2 岩倉土地整理図 川井村之図：石両全図

（2 a 区・2 b 区を含む）〔岩倉市提供〕

1 a 区 S D019・1 a 区 S D018の延びる北西の先には権現山遺跡（岩倉市）が所在し、あるいは権現山方向へと続く道筋として利用されていたことも想像できる。

次に中世の土坑について記したい。2 a 区2面、R g 区1面、2 d 区で確認できた方形土坑は、主軸が東西ないしは南北となるものがある。いずれも掘削直後に埋め戻されているような堆積土で、斑土のものも認められた。これらの方形土坑は、墓である可能性が高いといえる。

本遺跡を二分するかのように基本東西方向に延びる前述した溝（道路）を境に、南

側に位置する1c区・1d区・2b区・2c区・Rc区にかけては、屋敷を囲む区画溝などが確認されているが、北側では方形土坑などが点在するに過ぎない状況である。2d区にて実施した中世の水田の有無を調べるためのプラント・オパール分析では、イネ科植物の生育していた環境であったことがわかっており、水田が営まれていた可能性が高いといえる（第4章第4節参照）。このことから、この溝（道路）を境にして居住空間と水田などの農耕地や墓域に土地利用が分けられていたことが想像できる。

（後藤秀）

（6）近世村絵図から見た下田南遺跡について

天保12（1841）年に描かれた近世村絵図と明治17（1884）年に作成された地籍図から、今回の調査区周辺をみていきたい。

本遺跡は五条川の右岸、標高6m前後の自然堤防上に位置する。村絵図によると、岩倉市は12ヶ村から構成され、下田南遺跡は川井村（現川井町）に位置する。5-図7は、『岩倉市史』（1981）より近世市域村落図と川井村図を再トレースしたものである。本遺跡全体は畑の中にあり、周辺には田畑が広がっているのがわかる。本遺跡の北東に描かれている光禅寺、白山宮、大昌寺は現在も川井町に位置する光禅寺、白山社、大聖寺と思われる。

5-図8は、本遺跡周辺の地籍図と等高線図である。村絵図同様に田畑が広がっているのがわかる。また、本遺跡周辺の表層地形の等高線図によると、本遺跡の北側は標高が高く、南側は低くなっているのがわかる。周辺の村々は、五条川に伴う自然堤防上に位置している。標高の高い場所には宅地や畑地の密度が高く、標高の低い場所は水田や草生が多い。国土地理院の空中写真を見ると、昭和35～44年（1960年代）までは地籍図同様の地割りがみられ、その後の昭和45～54年（1970年代）には圃場整備が行われて現在に至っている。

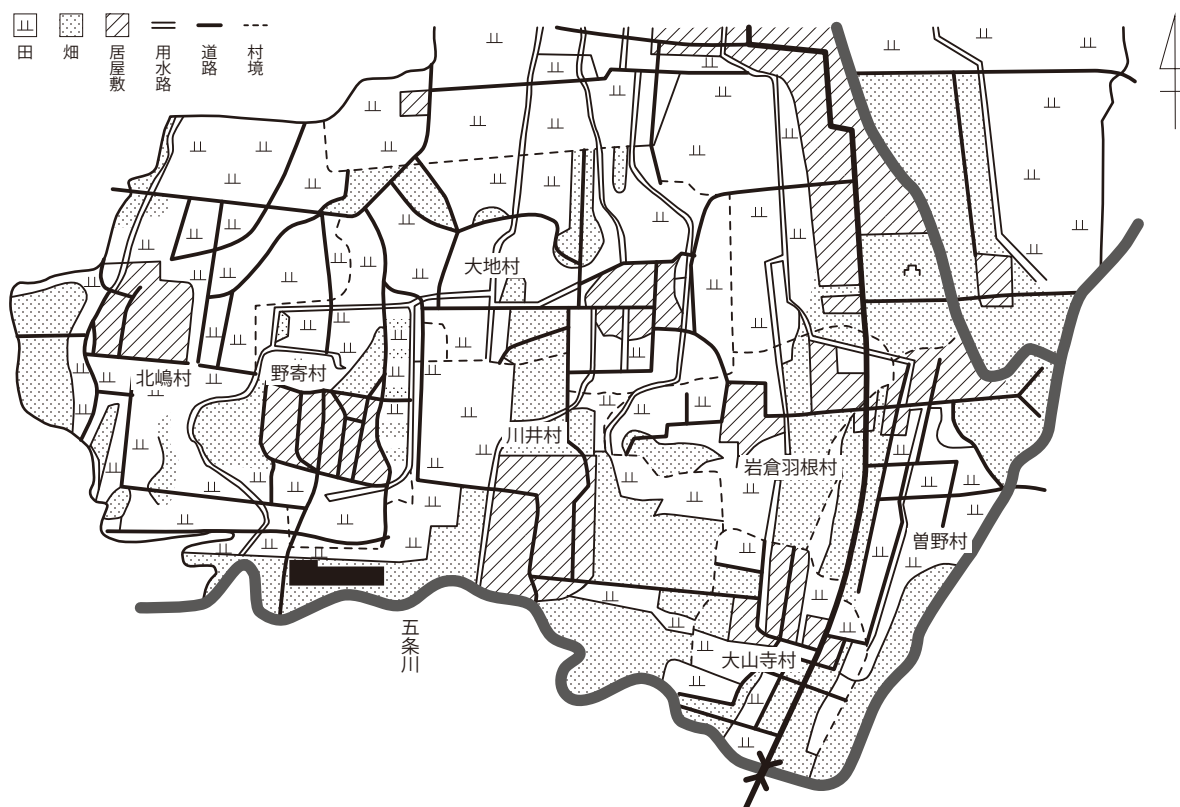
以上のことから少なくとも天保年間（1830～1844年）の後半以降、本遺跡周辺は主に田畑が広がる景観となり、現在まで続いていたといえる。

（三島）

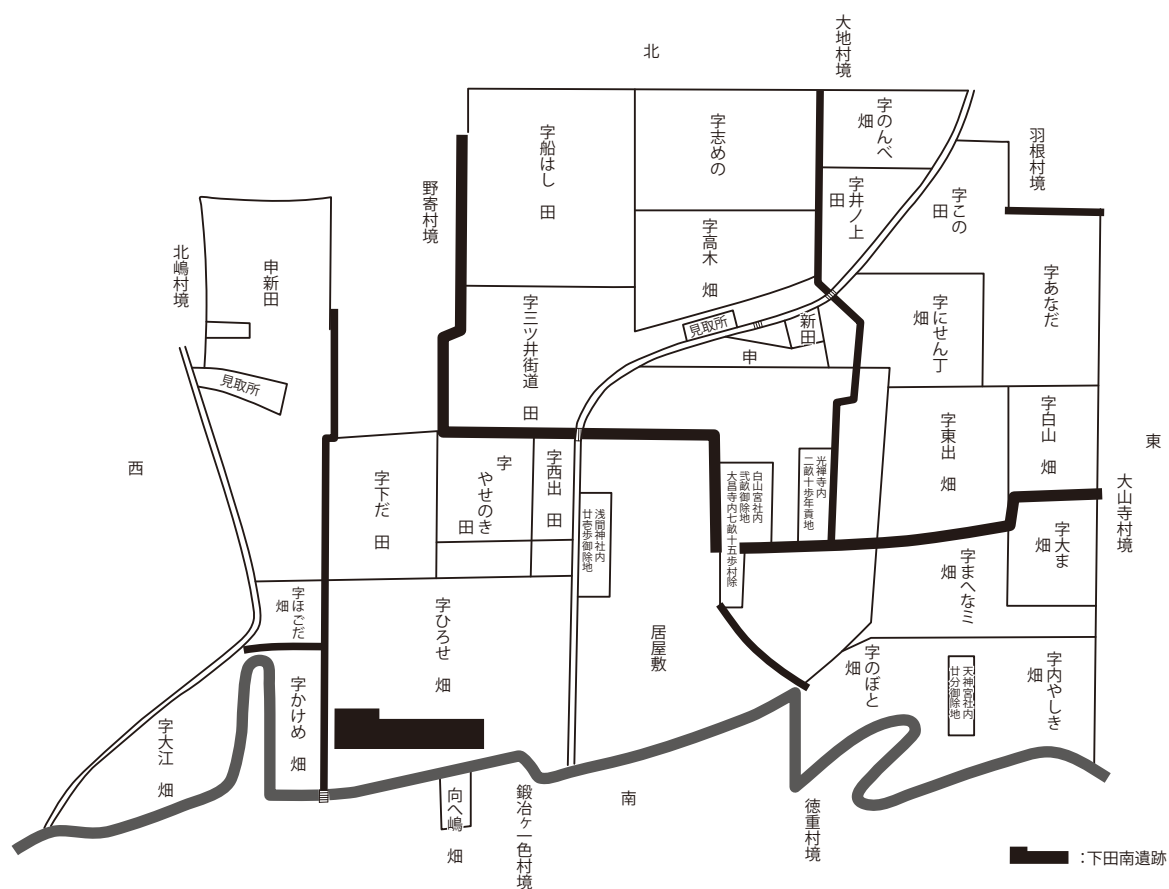
（7）旧五条川（旧河道）について

今回の発掘調査によって、現在の五条川として河川改修が実施される以前の旧五条川（幼川）の右岸の一部分と考えられる旧河道が確認できた。現在の五条川右岸の堤防より北に20～70mほどの地点となる。時期的には、層位と出土遺物から中世以降と考えられる。岩倉地域における旧河道の変遷については、地籍図と表層地形の分析から詳細に検討がなされており、古段階（縄文時代～古墳時代）、中段階（古代～戦国時代）、新段階（戦国時代～明治時代）の過程が示されている（蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴2015）。今回の調査で旧河道が確認できた地点は、岩倉市域において北東～南西の方向にほぼ直線的に流下する五条川が、西へと大きく屈曲して一宮市・清州市・北名古屋市の市境付近にて青木川に合流するまでの流域である。岩倉市域をほぼ直線的に流下する五条川が、西へと大きく屈曲することは「物理学的・地質学的に考えて極めて不自然」と考えられており、瀬替えなどの人工的な改変があったことが指摘されている（蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴2015、p.84）。

調査で確認できた旧五条川（旧河道）は、蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴（2015）の各氏が復元想定する旧河道E（蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴2015、p.83）の延長線上に相当することから、中段階から新段階にかけての旧河道であった可能性が高い（5-図9）。岩倉市域をほぼ直線的に流下する五

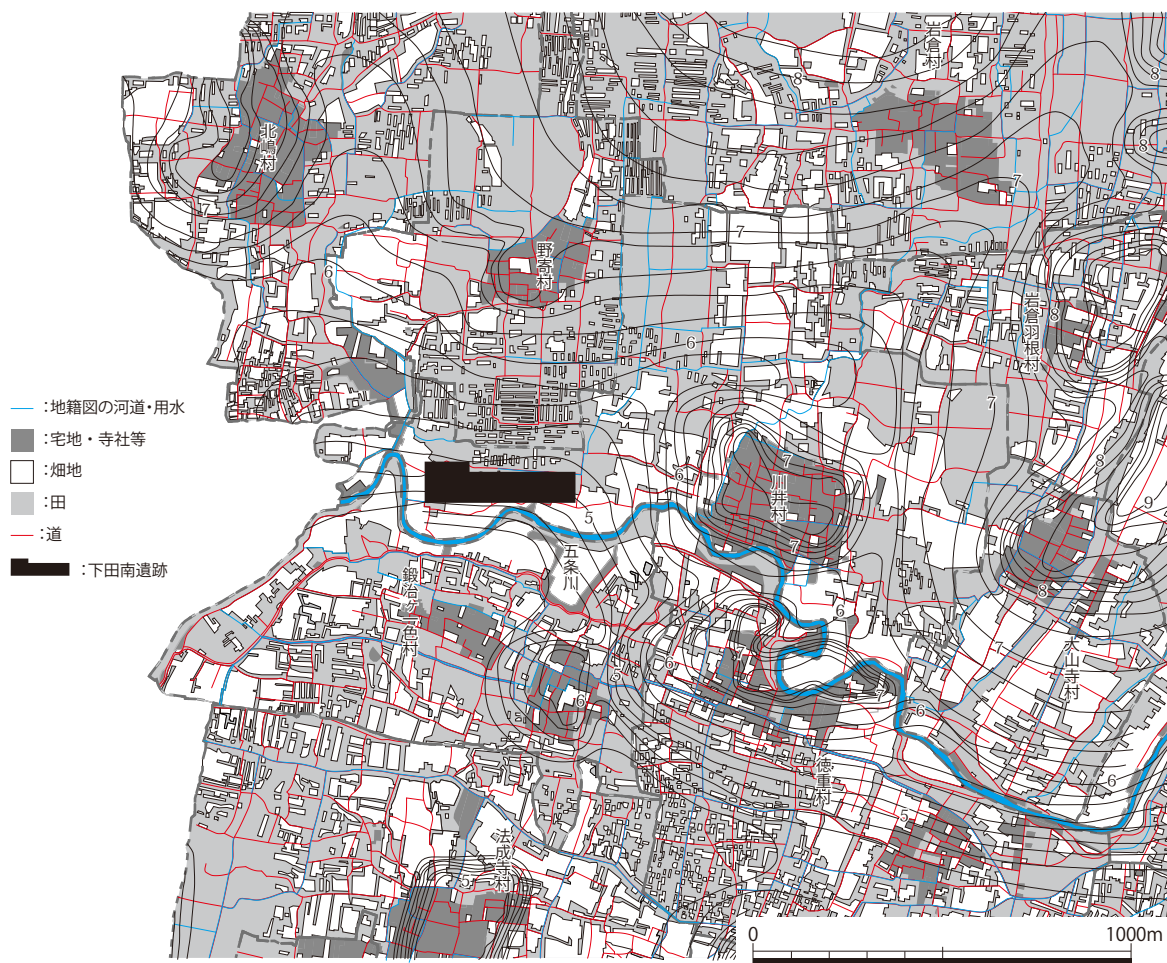


『岩倉市史』上巻(1985) P.92より再トレース一部改変
 [原図:『岩倉市史 資料1 近世村絵図 金石文』]



『岩倉市史 資料1 近世村絵図 金石文』(1981)川井村より再トレース

5-図7 近世の岩倉市域村落図(上図)・川井村図(下図)



『五条川流域の河道変遷と岩倉の歴史景観』より一部改変

5-図8 下田南遺跡周辺の地籍図・等高線図 (1:20,000)

条川（幼川）が瀬替えなどの改変で、西へと大きく流れを変えて以降、五条川（幼川）として機能していた時期があったと考えられる。

(基峰)

第2節 遺物

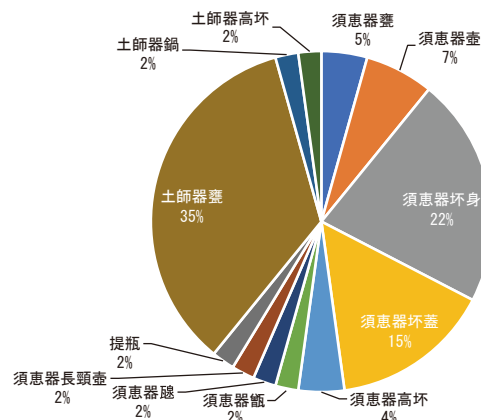
(1) 2a区2面SD166ほか(境界溝)出土の土器群について

今回の下田南遺跡の発掘調査において、2a区2面・Rd区・2b区・Rf区にかけて延びる長狭な溝(2a区2面SD166・2b区SD005[SK027]・Rd区SD162・Rf区2面SD045)の底面から合計46点の土師器・須恵器が出土した(第403～406図[写真図版352～355]-930～956、第413・414図[写真図版361・362]-1049～1063、第443図[写真図版358]-1450～1455)。この溝は、下田南Ⅲ期(6～7世紀中頃)を中心としたものであるが、出土した土器から考えて下田南Ⅳ期(7世紀後半～8世紀中頃)まで継続した可能性が高い。この溝を境にして、西側は掘立柱建物や竪穴建物などの生活にかかわる遺構が多く見つかっており、東側では西側で見られるような生活にかかわる遺構が極端に減少しほぼ無くなるといっても過言ではない状況であった。周辺の遺構の出土状況からは、本溝が集落区域の境界を示す溝であったと考えることができる。ここでは、4カ所の地区をまたぐこの溝を境界溝(2a区2面SD166・Rd区SD162・2b区SD005・Rf区2面SD045、以下「境界溝」と記す)と呼称し、溝内から出土した土器群についてその概要をまとめ、その性格を考えたい。

境界溝から出土した土器群は、2a区2面SD166から数多くの土器がある程度の間隔をあけた状態で数地点に渡って出土し、継続して一体となるRd区SD162でも同様の状態であった。しかしながら境界溝の南端に位置する2b区SD005内SK027では、複数の大型の土器が1カ所にまとめられた状態で出土している。境界溝から出土した土器は残存状態が良好なものが多く、特に土師器甕は上層から押しつぶされたような状態で出土しており、そのほとんどが完形に近い状態に接合可能であった。出土状態から、これらの土器群が単に溝に廃棄されたものではないことが考えられる。

5-表2は境界溝から出土した土器の器種別の構成と数量で、円グラフは境界溝から出土した土器の割合を表したものである。各調査区の溝内からの出土傾向として、須恵器坏類と土師器甕が共通して出土することが指摘でき、双方を合わせると境界溝から出土した土器の半数以上を占める。須恵器は坏類のほかに甕・壺・高坏・甗・長頸壺・提瓶が出土している。土師器は甕のほかに鍋・高坏が出土しているが、その大半を煮炊具が占める。この状況は、愛知県下での古代の土師器の出土傾向とおおよそ一致している(城ヶ谷和広1991)。ただし、Rd区SD162から出土した須恵器坏蓋(第443図[写真図版388]-1450)、土師器高坏(第443図[写真図版388]-1453)は出土層位が溝底面でないことと、出土地点に近いRd区SD162断面k-k'間の堆積土の状況から判断して、流入した可能性が考えられる。出土した須恵器坏類はほとんどが完形に近い合子型のもので、やや時代が下った天井部につ

		2a区2面	Rd区	2b区	計
須恵器	甕	1	0	1	2
	壺	3	0	0	3
	坏身	5	1	4	10
	坏蓋	2	1	4	7
	高坏	2	0	0	2
	甗	0	1	0	1
	甗	1	0	0	1
	長頸壺	1	0	0	1
	提瓶	1	0	0	1
土師器	甕	9	2	5	16
	鍋	0	0	1	1
	高坏	0	1	0	1
計		25	6	15	46



5-表2 2a区2面SD166ほか(境界溝)から出土した土器群の器種別個数と割合比率

まみや口縁部に返りを持つ蓋に伴う無台や有台の坏身は出土しなかった。坏蓋と坏身の出土量を見ると、坏蓋より坏身の出土量の方が多いことがわかる。土師器甕は境界溝全体で16点出土しており、大まかには長胴型甕と体部が球形の小型甕の2種類に分けられ、長胴甕が4点、小型甕が12点出土している。土師器甕は、平底と丸底のものがあり、2 a 区2面S D166とR d区S D162から出土した土師器甕には明瞭なススの付着が見られない。また、出土した土器で特に特徴的なものは、2 a 区2面S D166から出土した頸部に穿孔がある須恵器壺（第404図〔写真図版353〕-942）である。

5-図10は境界溝から出土した土器の出土位置を示したものである。基本的に土器は溝の底面に配置される傾向が見られ、2 a 区2面S D166の北側では土器がまとまって出土しているが、南に下るほど溝底面から出土した土器の量は減少し、2 b 区S D005内S K027にて再び土器が集中して群となって出土している。2 b 区S D005内S K027では、2 a 区S D166やR d区S D162とは土器の出土状況が大きく異なるが、溝の連続性と2 b 区S D005内S K027の周囲からこの土器群に関連する遺構が確認できなかったことから、境界溝に伴う土器群と考えられる。土師器甕で完形に近いものは底面に横たわった状態で出土しているが、甕ごとに向きが異なって出土しており、連続して一定の方向に向けて配置されたものはない。須恵器坏類は、坏蓋は天井部を上、坏身は口縁部を上に向けた状態で出土したことが多い。2 a 区2面S D166・R d区S D162までの区間で出土した土器については、出土地点の間隔がある程度あいているが、地点によって間隔が不規則なため、溝内の流水によって本来の位置から流された可能性も考えられる。

次に出土した須恵器坏類と土師器甕の特徴を少し詳しく見ておきたい。

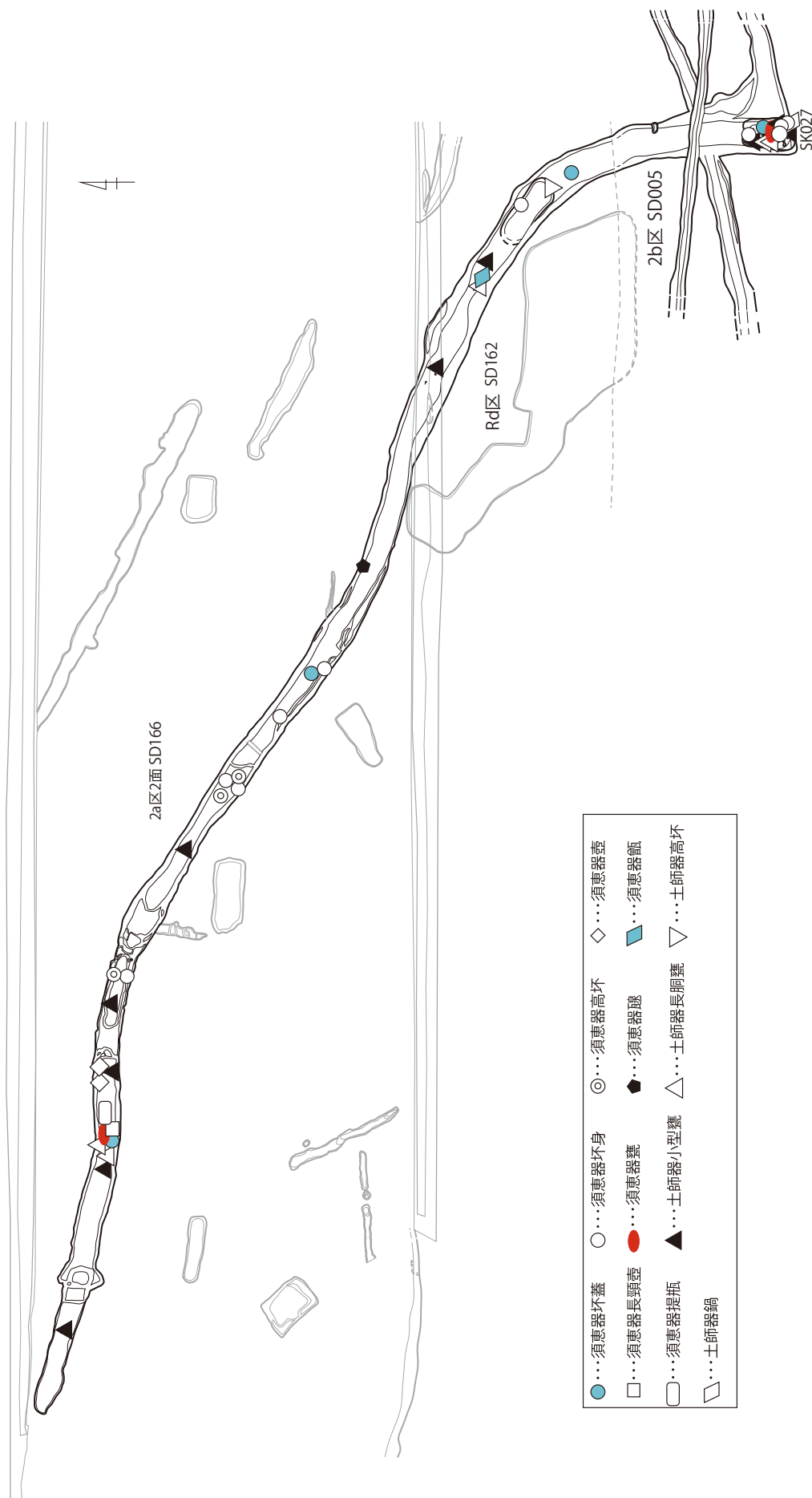
（1）須恵器坏類

須恵器坏類については、『愛知県史 別編 猿投系』（愛知県2015）の編年表を参考にした。須恵器坏類の傾向としては、坏身は受部が内傾し、ほとんどの坏身の口径が約10.0～11.0cmの間におさまる。また、底部は回転ヘラケズリを施し、丸底と平底の両方が存在する。坏蓋は口径が約11.0～12.5cmの間で、天井部の半分以上に回転ヘラケズリが施されている。また、天井部と口縁部の境となる稜が明瞭なものと、不明瞭で沈線状のものがある。これらの傾向は、編年表（愛知県2015、pp.718-735）のⅡ-4期～Ⅲ-1期（H-44号窯式期～H-15号窯式期）の須恵器坏類の傾向に当てはまり、これらの須恵器坏類と同様のものと考えられる。

（2）土師器甕

土師器甕については、長胴型・小型甕ともに口縁端部がつまみ上げられているものが多く、表面は摩滅して明瞭ではなかったが、目の細かいハケ調整が施されていることがわかる。この特徴は「伊勢型甕」に見られるもので、尾張地域でも6世紀代から出土することがわかっている。『愛知県史 資料編4 飛鳥～平安』（愛知県2010）によれば、「伊勢型甕」は7世紀前半頃には口縁部の屈曲が強くなり、口縁端部がシャープにつまみ上げられ、時期が下ると口縁部の屈曲が弱まって、つまみ上げも小さくシャープさがなくなる傾向が見られるのが特徴である。出土した土師器甕はこの特徴に一致することから、そのほとんどが「伊勢型甕」に相当すると考えられる。しかしながら、長胴型甕のうち1点（第414図〔写真図版362〕-1062）は、平底で口縁部の外反が短く、体部が粗いタテハケで調整されていることから、7世紀後半～末頃に出現する「濃尾型甕」と考えられる。

最後に、境界溝から出土した土器の性格について考えたい。この溝は、周辺の遺構の状況から考えて、集落内と集落外の境界を示すものと判断でき、出土した土器群は、何らかの祭祀活動における祭具として使用されたことが予想できよう。周辺に目を向けると志賀公園遺跡（名古屋市）においては、自然流路内から大量の土器のほかに斎串などの木製品の祭祀具が出土しており、祭祀行為の痕跡であ



5-図10 2a区2面SD166ほか（境界溝）から出土した土器の機種別地点

ることが指摘されている（愛知県埋文セ2001・2004）。今回調査を行った境界溝からは、滑石製模造品やミニチュア土器、斎串、土馬などの所謂祭祀具に該当する遺物が出土していないため、明確に祭祀行為が行われたかどうかは不明であるが、集落の境を示す境界溝という性格からも、土器を祭具とした祭祀行為が行われた可能性は高いと考えられる。

以上が、今回調査を実施した下田南遺跡の境界溝から出土した土器群の特徴である。本遺跡において、この境界溝と同様に土器群が出土した溝などの遺構は見当たらず、この溝が非常に特色あるものであったことがわかる。しかし、先述のように祭祀具のような遺物の出土がないことから、明確に祭祀行為が行われたかは定かではないが、この溝を境にして、建物遺構の分布に差が見られることは確かなことで、出土した土器群も意図的に配置ないしは埋納されたものと考えざるを得ない。

（後藤泰）

（2）円面硯・転用硯について

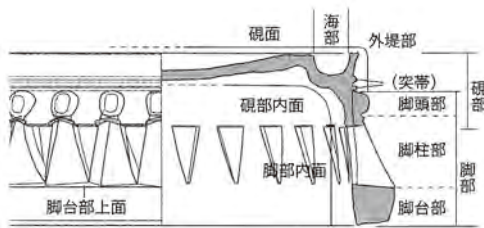
下田南遺跡からは、円面硯 3 点（第358図〔写真図版314〕-245、第361図〔写真図版315〕-280、第388図〔写真図版341〕-730）と転用硯 6 点（第361図〔写真図版316〕-298、第362図〔写真図版317〕-303、第371図〔写真図版325〕-451、第388図〔写真図版340〕-720、第388図〔写真図版340〕-721、第417図〔写真図版364〕-1098）が出土した。

古代の墨書土器や木簡などの文字資料が出土しなかった本遺跡において、陶硯の存在は本遺跡の官衙的様相を知る上で重要な遺物である。個々の遺物の解説は、第3章で触れている通りで、ここでは改めてより詳細に記述し、近隣遺跡から出土した陶硯に触れつつ若干の考察を加えたい。なお、円面硯の各部名称と分類については『平城京出土陶硯集成 1・2』（奈文研2006・2007）に依った（5 - 図11【1】・【2】）。

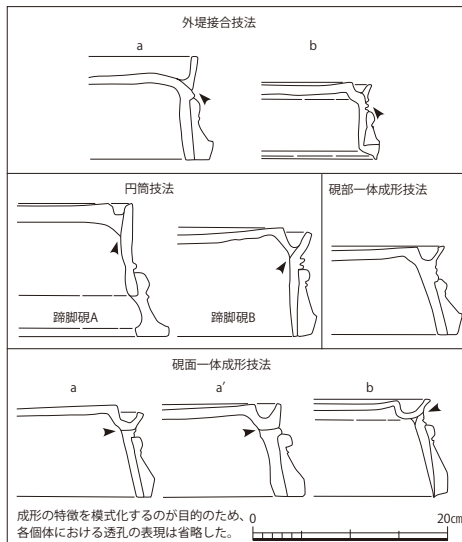
まずは円面硯についてみていきたい。

1 c 区 S K 622出土円面硯（245）は、蹄脚円面硯 A に分類される。脚頭は全て剥離し失われているが、半球形の脚頭が付けられていたと思われる。硯面は水平で外堤部が少し高く、突帯から外堤部端までの幅が広い。硯部内面は緩やかな曲線で凹凸は無く、内面に降灰が付着していることから倒置状態で焼かれたと考えられる。高蔵寺 2 号窯（春日井市）や平城宮 S D 4951 から出土した円面硯と類似しており、共伴遺物からみても高蔵寺 2 号窯期（8 世紀第 1 四半期）のものと考えられ、同じ窯で作られた可能性がある。また、断面には粘土の接合痕があり、突帯を含む硯部下半と、硯面と外堤が一体となった硯部上半に分けられる。青木敬氏の接合技法の分類（5 - 図11【3】）によれば、「硯面一体成形技法」にあたると考えられる。ただしこの技法は「今のところ蹄脚円面硯 B にのみ認められる」（青木敬2014, p.24）ようで、蹄脚円面硯 B は 8 世紀第 2 四半期以降に出現したと考えられているため、この技法の初現が遡る可能性がある。今後より詳細な検討が必要と思われる。

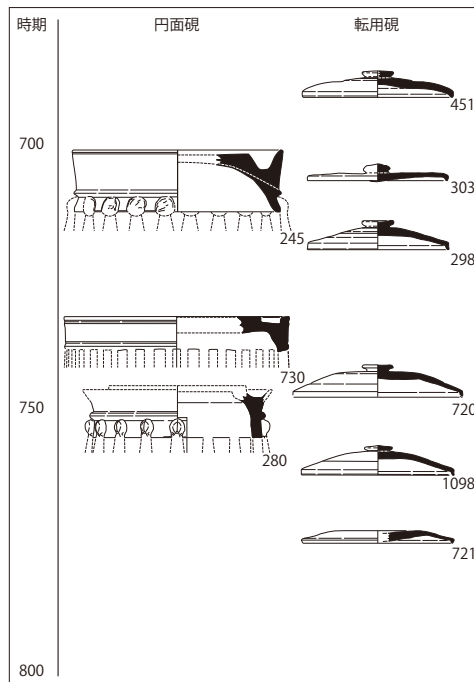
1 c 区 S D 135出土円面硯（361）は、蹄脚円面硯 B に分類される。硯部のごく一部に脚頭が 1 つ残存した破片で、硯面と外堤部端が残存していないためその形状は推定で、法量も誤差を含む。脚頭は中心に若干の稜をもつ半球形で、内面に降灰と自然釉が付着しており倒置状態で焼かれたと考えられる。中世の溝（1 c 区 S D 135）から混入して出土したため、共伴遺物から時期の推定は困難であるが、蹄脚円面硯 B は愛知県内の生産地では 8 世紀第 2 四半期に位置づけられる篠岡 81 号窯（小牧市）から出土しており、平城京内では「平城Ⅲ古段階には確実に使用、廃棄していた」（神野恵・川越俊一2003, p.56）と考えられていることから、本遺物も 8 世紀中頃を中心とする時期と考えたい。成形技法は、断面に接合痕が確認されないため「硯部一体成型技法」と考えられる。



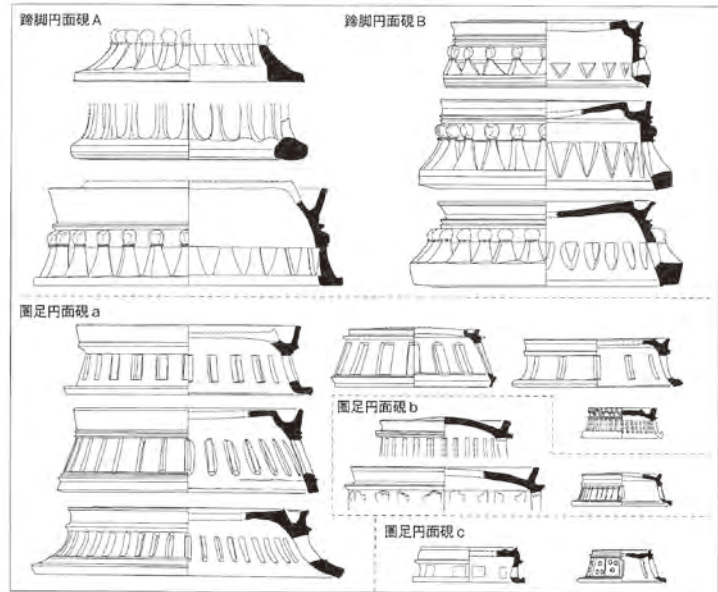
【1】円面硯の部位名称



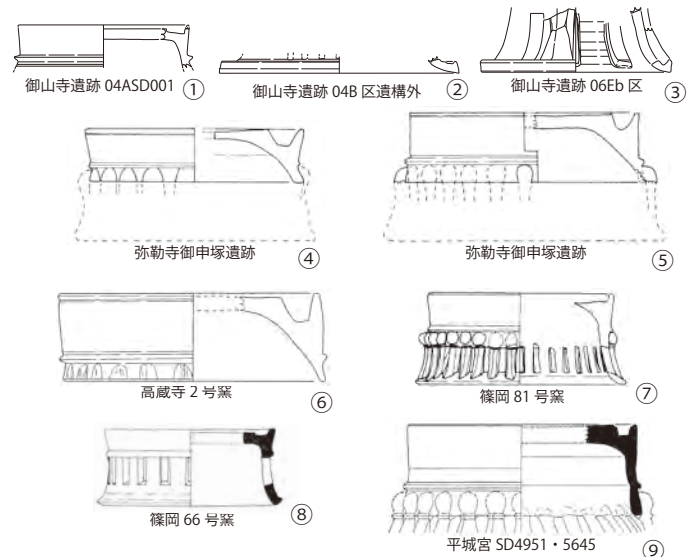
【3】蹄脚硯Bの成形技術分類模式図



【4】下田南遺跡出土陶硯の時期（1:8）



【2】円面硯の種類



番号	遺跡名	地区・遺構名等	種別	外堤径	硯面径	底径	器高
245	下田南遺跡	1c区SK622	蹄脚円面硯A	(22.0)	(15.2)	—	(6.5)
280	下田南遺跡	1c区SD135	蹄脚円面硯B	(20.0)	(14.4)	—	(4.7)
730	下田南遺跡	1d区表土層	圓足円面硯a	(23.7)	(17.6)	—	(5.4)
①	御山寺遺跡	04A区SD001	圓足円面硯a	(18.0)	(13.6)	—	(4.7)
②	御山寺遺跡	04B区検出	圓足円面硯	—	—	(20.2)	(0.9)
③	御山寺遺跡	06Eb区	蹄脚円面硯B	—	—	(20.0)	(6.7)
④	弥勒寺御申塚遺跡	表土層	蹄脚円面硯A	(23.0)	(15.4)	—	(5.6)
⑤	弥勒寺御申塚遺跡	表土層	蹄脚円面硯A	(24.0)	(18.4)	—	(7.4)
⑥	高蔵寺2号窯	—	蹄脚円面硯A	(28.0)	(18.4)	—	(9.2)
⑦	篠岡81号窯	—	蹄脚円面硯B	(19.8)	—	—	9.5
⑧	篠岡66号窯	—	圓足円面硯a	(18.2)	(13.6)	(20.0)	8.1
⑨	平城宮	SD4951・5645	蹄脚円面硯A	23.6	18.7	—	(10.1)

※寸法の（ ）は復元径または残存長を表す

【5】周辺遺跡・平城宮出土の主な円面硯（1:8）と法量

5-図11 円面硯の部位名称・種類・分類・出土陶硯の時期・参考事例と法量

【1】：奈文研2006・p.26、【2】：奈文研2006・p.iii、【3】：青木敬2014・p.24、
 【5】：①～③ 愛知県埋文セ2011・p.83 p.126 p.155、④・⑤ 南山大学大学院ほか1998・図版7、
 ⑥愛知県2015・p.425、⑦愛知県教委1983・p.39、⑧小牧市教委1976・p.62、⑨奈文研2016・PL.9]

1 d 区表土層出土円面硯（730）は、圈足円面硯 a に分類される。出土した 3 点の中で最も外堤部径が大きく、脚柱の数は推定 38 本程度と多脚である。僅かに内堤があり、海部と外堤部は幅広い平坦な形状で、側面の突帯の隆起が小さい。内面に自然釉が付着していることから倒置状態で焼かれたと考えられる。断面に接合痕は無く、「硯部一体成形技法」で作られたと考えられる。硯部の特徴が類似するものとしては、篠岡 66 号窯（小牧市）からの出土がある。篠岡 66 号窯は、8 世紀初頭～9 世紀初頭までの遺物が混在しており時期の特定には至らないが、透孔の数が多いことなどから飛鳥時代には遡らず、8 世紀前半～後半頃に収まると考えられる。

本遺跡の近隣の遺跡から出土した円面硯としては、御山寺遺跡（岩倉市）と弥勒寺御申塚遺跡（北名古屋市）からの出土したものが知られる。

御山寺遺跡は、本遺跡から北北東へ約 3.0km に位置する奈良時代後半～平安時代にかけての官人層が所在した集落とされ、3 点の円面硯が出土している（愛知県埋文セ 2011）。内訳は、蹄脚円面硯 B が 1 点、圈足円面硯が 2 点で内 1 点が圈足円面硯 a である。円面硯の時期については、平安時代前期と推定されているが、奈良時代後半に遡るものも含まれる可能性がある。御山寺遺跡は、本遺跡で集落の衰退が始まる時期以降に古代集落が形成されるという点でもその関連性が注目できる。

弥勒寺御申塚遺跡は、本遺跡から南東へ約 2.0km に位置し、2 点の蹄脚円面硯 A が出土している。2 点とも高蔵寺 2 号窯出土のものとよく類似しており、則ち本遺跡出土の 1 c 区 S K 622 出土円面硯（245）とも類似し、法量も近い。弥勒寺御申塚遺跡は、弥勒寺廃寺に隣接しており、「硯を使用することができたのは、弥勒寺廃寺の僧侶であった可能性が高い」と推測されている（南山大学大学院ほか 1998）。

他では蹄脚円面硯に限れば、尾張国府跡や東畑廃寺跡（いずれも稲沢市）からの出土が知られる。

次に本遺跡出土の転用硯について記したい。本遺跡からは前述の通り 6 点の転用硯が確認されている。全て須恵器坏蓋の内面を利用したもので、その中で墨痕が付着していたものは 1 c 区 S D 512 出土転用硯（303）のみで、他は内面が平滑になっていることから転用硯と判断したものである。なお全ての出土遺物について転用硯かどうかの精査・確認を実施しているわけではないので、増加する可能性はある。6 点の内でも最も古い器形なのが、1 c 区遺構外出土転用硯（451）で、7 世紀第 4 四半期（I-41 号窯式期）を中心とする時期と考えられ、最も新しい時期と考えられる 1 d 区遺構外出土転用硯（721）は 8 世紀第 3 四半期（NN-32 号～O-80 号窯式期）に相当する。他の転用硯 4 点については、その間の各時期に満遍なく分布するようである。

最後に、円面硯の検討から本遺跡が官衙的な集落として稼働していた時期と階層性の問題にふれてまとめとしたい。本遺跡では遅くとも 7 世紀末頃から陶硯が使用され始め、8 世紀後半頃まで継続して使われ続けていたことが明らかとなった。本遺跡では 7 世紀後半頃から倉庫をはじめとする掘立柱建物群が建てられ、8 世紀代の内にはほぼ廃絶する様相が確認されており、その時期とまさしく一致する。遺物の面からも、本遺跡が 7 世紀末頃～8 世紀後半にかけて官衙的性格を有していたことが傍証されたと言える。

また、本遺跡から出土した円面硯 3 点の内 2 点が蹄脚円面硯であるが、陶硯の種類は獸脚硯＞蹄脚円面硯＞圈足円面硯＞転用硯の順に格式を現すとされ（西口壽生 2003・2010）、蹄脚円面硯については、地方では国府・郡衙やその関連施設からの出土が顕著である。本遺跡は郡家（評家）の出先機関と想定され、郡司層かそれに近い階層の官人が常在して、蹄脚円面硯を使用していた可能性が高い。しかし近隣遺跡からも同時期の蹄脚円面硯が出土していることから窺えるように、本遺跡周辺地域では他地域に比べて蹄脚円面硯が末端の官衙施設や寺院である程度は流通していた可能性が指摘できる。

当地域は、蹄脚円面硯の生産地である尾北窯（春日井市・小牧市・犬山市）に近いことから、蹄脚円面硯の流通においては特殊な地域の可能性があり、その流通範囲の広がりや使用者の階層などの把握が今後の課題と思われる。

（小島）

（３）２c区出土の巡方（石帯）について

２c区S D700から出土した巡方（第427図〔写真図版374〕-1243）は、腰帶具の石帯（石製）で、特に重要な遺物である。腰帶具は、古代（奈良～平安時代前期）の律令的身分秩序を表した衣服令（えぶくりょう）の成立による身分表象で、在地社会において社会的・経済的に優位な地位（位階及び官職）にあった郡司層や富豪層の存在を示すものである。

本遺跡から出土した巡方は、石むらのない緻密で均一な黒色の硬質粘板岩を使用しており、やや横長の方形の無孔であるが、背面には潜り穴の痕跡が見られる。復元すると推定で高さ3.7cm、幅4.2cm、厚さは0.7cmの大きさと予測でき、残存の重さは13.0gである。全国規模で腰帶具の分析を実施した田中広明氏（2003）の分類によれば、石製巡方（潜り穴）Ⅳ期・無孔型式に相当する。無孔の石製腰帶具は8世紀末頃に出現し、その最盛期は10世紀前半頃で、11世紀代まで継続することが示されている（田中広明2003、p.25）。

愛知県出土の主要な石帯は、5－図12に示したとおりで、尾張・三河の地域ともに出土は稀有であるが、尾張国府跡からの出土が集中して目立つ。周辺に目を向けると、三重県出土の石帯については、斎宮跡（明和町）や六大B遺跡（津市）などから出土した巡方など、愛知県から出土した石帯に比べて3倍近くの出土が知られている（三重県埋文セ1992、p.8）。一方、愛知県出土の金属製の鈐帯については、市道遺跡（豊橋市）や梅坪遺跡（豊田市）など三河地域からの出土が知られている。特に市道遺跡の居館地区からは垂孔（細長孔）のある巡方9点が出土しており（豊橋市教委1996・1997・1998）、参河国渥美郡の幡太郷に関連する施設と考えられている（贅元洋2009）。

鈐帯（石帯）が出土した遺跡は、古代の国司・郡司などに関連する国府や郡家（評家）・駅家などの官衙施設や交通路との関連が従来から考えられてきた。本遺跡から石帯の巡方が出土したことは、遺物の時期はやや下るものの、社会的・経済的に優位な地位（位階及び官職）にあった郡司層や富豪層の存在を窺い知ることができ、本遺跡が地方の郡家（評家）の要素を色濃く持ち、その出先機関として機能していたことの裏付けのひとつになるものといえよう。

（基峰）

（４）R g区1面出土の軒丸瓦について

R g区1面の包含層から出土した軒丸瓦（第447図〔写真図版391〕-1500）は、本遺跡と川井薬師堂廃寺などとの関連を窺い知ることができる重要な遺物である。瓦当の外区直径は推定で約15.0cm、内区直径は推定で約11.5cmを測る。外区は無文で、内区には単弁（重弁）蓮華文が施され、花弁と子葉が高く突出し先端が尖り、子葉には稜線が見られ、中房を欠損している。

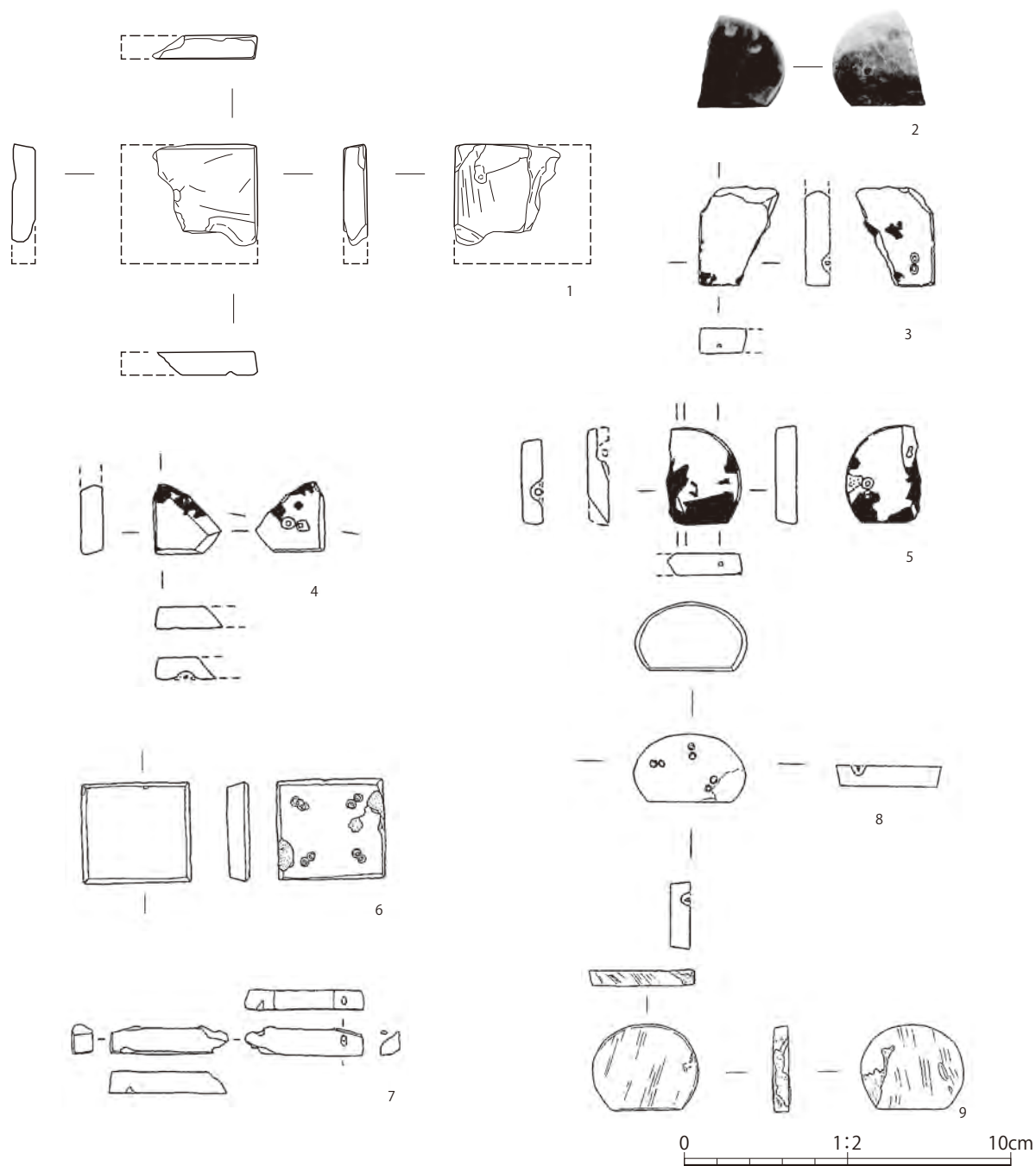
出土した軒丸瓦は蓮弁に重なる子弁を配置した文様で、川井薬師堂廃寺出土の軒丸瓦に同一文様のものが確認でき、所謂「坂田寺式」に相当するもので（愛知県2010、p.733）、尾張地域出土の古代瓦を詳細に分析・検討した梶山勝氏（2001）による「坂田寺亜式」の軒丸瓦に相当する。

『日本書紀』天武14（685）年3月の詔では「諸国每家作佛舎、乃置佛像及経、以礼拝供養。」と記載されるように全国規模で仏教の普及がなされ、『扶桑略記』持統6（692）年には「令計天下諸寺。

愛知県出土の主要な石帯(腰帯具)

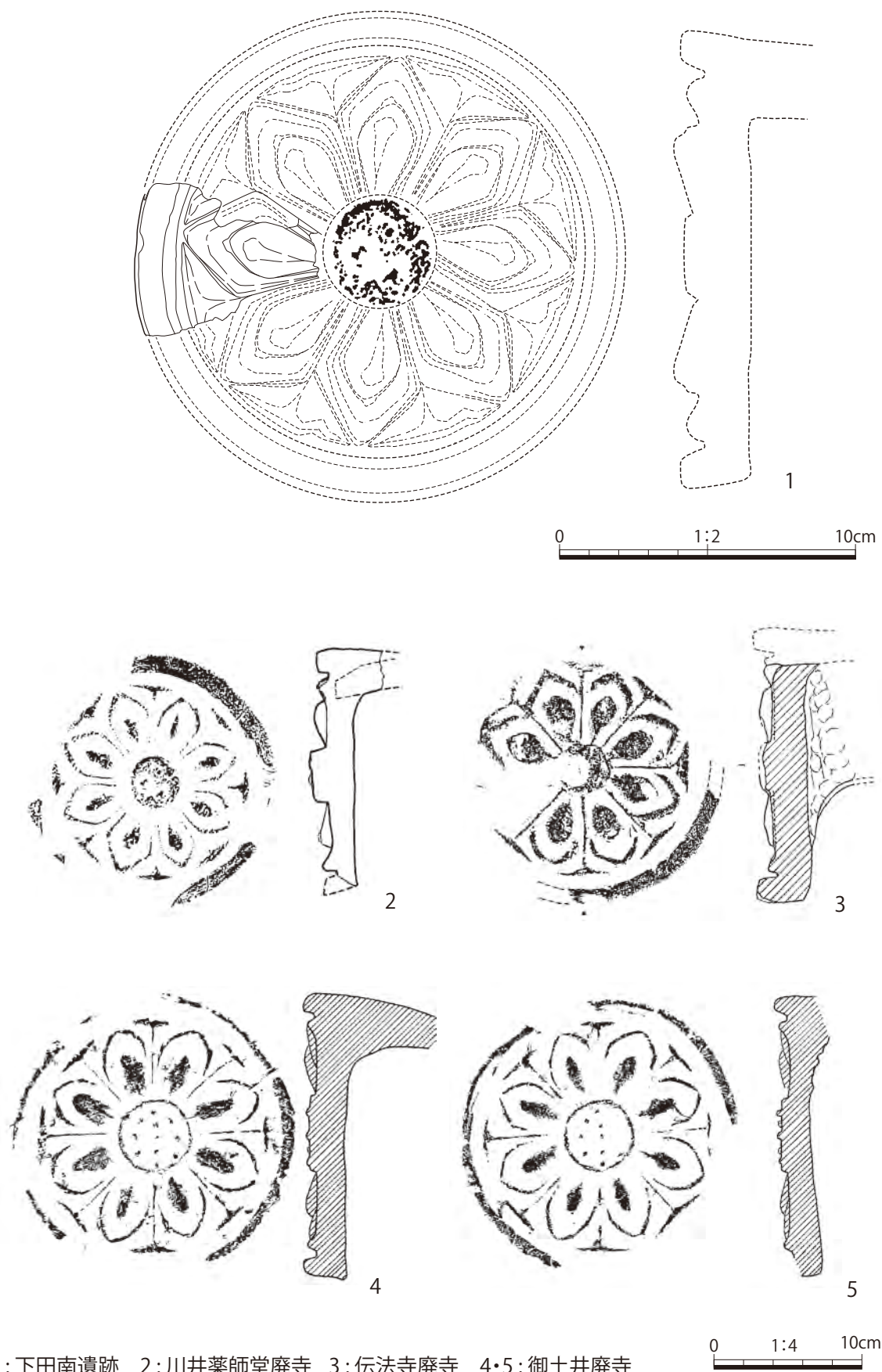
番号	地域	遺跡名	所在地	出土遺構	種別	孔	材質	高さ×幅×厚さ cm	潜り穴	主な出典文献
1	尾張	下田南遺跡	岩倉市川井町	2c区SD700	巡方	無孔	粘板岩	(3.1) × (3.2) × 0.7	(4)	
2	尾張	御山寺遺跡	岩倉市中野町・鈴井町	04B区1面包含層	丸柄	無孔	—	(2.7) × (2.5) × 0.8	(3)	愛知県埋文セ2011
3	尾張	尾張国府跡	稲沢市国府宮一丁目ほか	SK105	巡方	無孔	大理石	(2.4) × (3.0) × 0.7	(4)	稲沢市教委1982
4	尾張	尾張国府跡	稲沢市国府宮一丁目ほか	SK105北側	巡方or鉤尾	無孔	大理石	(2.1) × 2.1 × 0.7	(3) or (4)	稲沢市教委1982
5	尾張	尾張国府跡	稲沢市国府宮一丁目ほか	SK105北側	丸柄	無孔	大理石	(2.2) × 2.9 × 0.6	(3)	稲沢市教委1982
6	三河	梅坪遺跡	豊田市東梅坪町	SX1101	巡方	無孔	ホルンフェンス or粗粒玄武岩	3.3×3.1×0.6	4	豊田市教委2003
7	三河	下六光寺遺跡	豊川市八幡町	包含層	巡方	—	蛇紋岩	(0.9) × 4.6 × 0.6	(4)	豊橋市教委2013
8	三河	淡洲神社北遺跡	豊川市小田淵町七丁目	砂礫層直上IXG3r	丸柄	無孔	チャート	2.1×3.4×0.6	3	愛知県埋文セ1991
9	三河	普門寺旧境内	豊橋市雲谷町	元々堂址東斜面	丸柄	無孔	黒色硬質	3.2×2.6×0.5	0	豊橋市教委2016

※高さなどの数値は（ ）は残存、また公表数値の小数点2位以下は四捨五入とした。潜り穴の（ ）数値は推定である。



5-図12 愛知県出土の主要な石帯(腰帯具)

[2 : 愛知県埋文セ2011・p.120 抜粋・加筆、3～5 : 稲沢市教委1982・図版13、6 : 豊田市教委2003・P.55、7 : 豊橋市教委2013・p.196、8 : 愛知県埋文セ1991・p.130、9 : 豊橋市教委2016・p.244]



1: 下田南遺跡 2: 川井薬師堂廃寺 3: 伝法寺廃寺 4・5: 御土井廃寺

5—図13 R g 区 1 面出土軒丸瓦の復元と周辺出土の坂田寺垂式軒丸瓦

[2 : 梶山勝2001・p.6 第2図、3 : 一宮市教委2006・図27、4・5 : 岩倉市教委1983・p.30 図版Ⅱ、p.31 図版Ⅲ]

凡五百四十五寺」という記載があるように、諸国に545寺におよぶ寺院の建立がなされたことがわかる。古代尾張の地域における寺院建立は、7世紀後半に出現する。瓦の特徴から、その特色は畿内先進寺院の瓦当文様を長期間におよび継続して使用した点（愛知県2010、p.730）と言われている。古代尾張国の前期国府と推定される塔の越遺跡（稲沢市）や平安時代以降の国府跡（稲沢市）が所在する尾張の中心地であった中島郡にて、まずは地方寺院の先駆けとして東畑廃寺（稲沢市）の建立がなされている。東畑廃寺は、金堂・塔・講堂のほかに複数の基壇建物を持ち、法起寺式の伽藍配置であったことが知られている。春部郡の篠岡2号窯（小牧市）で生産された坂田寺式の軒丸瓦（単弁蓮華文軒丸瓦）が東畑廃寺に供給されており、その系譜を引くと考えられる坂田寺垂式の軒丸瓦が、丹羽郡を中心に展開することが知られている。このことは、丹羽郡と春部郡の地域での地方豪族（氏族）層の結びつきの強さないしは同族関係を示すものと考えられている（梶山勝2001、p.10）。『和名類聚抄』の記述によれば尾張国春部郡には、「池田、柏井、安食、山村、高苑、餘戸」の6郷の名称を窺い知ることができ、丹羽郡12郷と春部郡6郷との不可分な関係が想像できる。

また、丹羽郡を中心に展開する坂田寺垂式の軒丸瓦は、川井薬師堂廃寺と近接して建立された伝法寺廃寺（一宮市）や御土井廃寺（岩倉市）から出土しており、その共通性を窺い知ることができる（5－図13）。川井薬師堂廃寺と伝法寺廃寺・御土井廃寺出土の坂田寺垂式の軒瓦は、丹羽郡内の官林瓦窯（犬山市）及び春部郡内の白山瓦窯（春日井市）で生産され、各寺院に供給されたものと考えられている（愛知県2010）。坂田寺垂式の軒瓦の生産は、生産地と消費地との間に距離があることから、河川を利用した消費地への運搬が優先されたことが指摘されており、尾張の北部地域では瓦陶の兼業窯ではなく、その必要性に応じて瓦工人を招聘して瓦生産が行なわれていたことが考えられている（愛知県2010、p.744）。本軒丸瓦は、川井薬師堂廃寺のものと考えられ、官林瓦窯で生産された可能性が高い。

川井薬師堂廃寺は、昭和47（1972）年の土地改良工事に伴って塔の心礎や礎石が出土したことで（岩倉市1985、p.203）、昭和57（1982）年度と昭和59（1984）年度の2回にわたって部分的な発掘調査が行われているが、建物構造や伽藍配置などその詳細はわかっていない（岩倉市教委1991）。また官林瓦窯で生産された坂田寺垂式の軒瓦以外に、高蔵寺瓦窯（春日井市）で生産された藤原宮式の軒瓦が、勝川廃寺（春日井市）と併せて供給されていたことがわかっている。丹羽郡の旧五条川の右岸堤防上では、同時期に近接して川井薬師堂廃寺・伝法寺廃寺・御土井廃寺の3寺の地方寺院の建立が成されており、寺院の建立が郡司層だけではなく里（郷）長層まで広がっていた可能性も考えられることから、川井薬師堂廃寺については伽藍配置を有する寺院ではなく、村落内寺院的な小規模な寺院であった可能性も指摘されている（梶原義実2017、pp.62-63）。

しかしながら、今回の調査成果によって、本遺跡が地方の郡家（評家）の要素を色濃く持ち、その出先機関として機能していた可能性が高いことが考えられることから、川井薬師堂廃寺が、郡（評）家周辺寺院としての要素を色濃く持っていたことが指摘できる。地方社会では、有力豪族（氏族）が建立した小規模な古代地方寺院が、郡（評）家周辺寺院と併存することは既に知られており（山中敏史2005、p.42）、本遺跡と川井薬師堂廃寺との関連が強かったことが予測でき、川井薬師堂廃寺が郡（評）家周辺寺院としての性格を色濃く持っていたことが想像できる。

（基峰）

（5）漁撈錘（管状土錘・陶錘）について

今回の調査では、各地区から漁撈具である漁撈錘（土錘・陶錘）が出土しており、図化できたもの

出土した漁撈鍾(管状土鍾・陶鍾)

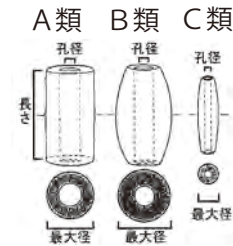
番号	図版番号	種別	形状	長さ×最大径 cm	重さ g	重さの補正
1	14	土鍾	C類(樽形a)	(2.7) × 0.9	(4.2)	残存×2倍
2	35	土鍾	C類(樽形a)	4.9×1.7	11.7	—
3	95	土鍾	C類(樽形a)	4.6×1.2	4.7	—
4	175	土鍾	C類(樽形a)	(3.0) × 1.5	(12.0)	残存×2倍
5	202	土鍾	C類(樽形a)	(4.0) × 1.4	(15.2)	残存×2倍
6	211	土鍾	C類(樽形a)	(3.8) × 1.5	(14.2)	残存×2倍
7	255	陶鍾	C類(樽形a)	(3.2) × 1.1	(5.4)	残存×1.5倍
8	419	陶鍾	C類(樽形a)	5.5×1.1	7.0	—
9	429	陶鍾	C類(樽形a)	6.1×1.2	9.9	—
10	488	陶鍾	C類(樽形a)	5.4×1.1	5.9	—
11	495	陶鍾	C類(樽形a)	4.5×1.1	4.8	—
12	532	土鍾	C類(寸胴形a)	(3.3) × 1.4	(12.2)	残存×1.5倍
13	582	土鍾	C類(樽形a)	5.1×2.1	21.2	—
14	607	土鍾	C類(樽形a)	(3.4) × 1.1	(4.5)	残存×1.5倍
15	608	土鍾	C類(樽形a)	4.7×1.2	4.2	—
16	616	土鍾	C類(寸胴形a)	(4.1) × 1.0	(4.5)	残存×1.5倍
17	617	土鍾	C類(樽形a)	3.9×1.8	5.4	—
18	630	土鍾	C類(樽形a)	(1.2) × (0.8)	(3.5)	残存×5倍
19	662	土鍾	C類(樽形a)	4.2×1.3	5.5	—
20	663	土鍾	C類(樽形a)	(2.0) × 1.3	(5.2)	残存×2倍
21	745	土鍾	C類(樽形a)	5.4×1.9	14.8	—
22	746	土鍾	C類(寸胴形a)	4.5×1.1	5.7	—
23	747	土鍾	C類(樽形a)	(3.6) × 1.5	(9.2)	残存×1.5倍
24	748	土鍾	C類(寸胴形a)	(3.0) × 1.1	(5.4)	残存×1.5倍
25	871	陶鍾	A類(寸胴形b)	(3.3) × 1.6	(14.0)	残存×1.3倍
26	915	陶鍾	C類(樽形a)	4.9×1.1	5.4	—
27	916	陶鍾	C類(寸胴形a)	7.8×1.1	7.9	—
28	929	陶鍾	C類(樽形a)	5.2×1.1	5.8	—
29	955	土鍾	C類(樽形a)	5.4×1.4	9.6	—
30	966	土鍾	C類(寸胴形a)	4.8×1.0	4.6	—
31	1078	陶鍾	C類(寸胴形a)	(5.2) × 1.3	(10.2)	残存×1.2倍
32	1104	土鍾	C類(樽形a)	3.4×1.0	3.3	—
33	1130	陶鍾	C類(寸胴形a)	5.4×1.1	5.9	—
34	1143	土鍾	B類(樽形b)	4.1×2.0	11.3	—
35	1144	土鍾	C類(寸胴形a)	(3.4) × 1.3	(7.7)	残存×1.5倍
36	1145	土鍾	C類(樽形a)	3.3×1.3	4.5	—
37	1146	土鍾	C類(樽形a)	5.9×1.2	12.4	—
38	1152	土鍾	C類(樽形a)	4.6×1.2	5.7	—
39	1159	土鍾	C類(樽形b)	(3.9) × 1.8	(17.4)	残存×1.5倍
40	1258	土鍾	C類(寸胴形a)	(2.1) × 0.9	(3.0)	残存×2倍
41	1262	陶鍾	C類(樽形a)	3.9×1.3	5.0	—
42	1271	陶鍾	C類(寸胴形a)	4.3×1.1	4.0	—
43	1362	土鍾	C類(寸胴形a)	(3.7) × 1.2	(6.8)	残存×1.2倍
44	1384	土鍾	C類(樽形a)	(4.7) × 1.3	(11.1)	残存×1.3倍
45	1424	土鍾	C類(樽形a)	5.0×1.6	11.1	—
46	1437	陶鍾	C類(樽形b)	5.0×1.9	15.8	—
47	1439	土鍾	B類(卵形b)	5.3×2.7	41.0	—
48	1445	土鍾	B類(樽形b)	5.7×2.6	29.6	—
49	1446	土鍾	C類(樽形a)	4.5×1.3	6.5	—
50	1458	陶鍾	C類(寸胴形a)	(3.3) × 1.1	(7.1)	残存×1.5倍

※長さ・幅の()は残存、重さの()数値は補正した推定値で、数値の小数点2位以下は四捨五入とした。

5-図14 出土した漁撈鍾(管状土鍾・陶鍾)の形状分類と比率

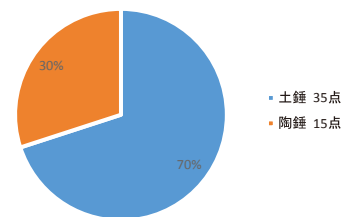
[分類図: 安岡早穂2018・p.72 図1の一部に加筆、富山県文振団埋文事2007・p.112 再トレースして加筆]

管状土鍾・陶鍾の形状分類

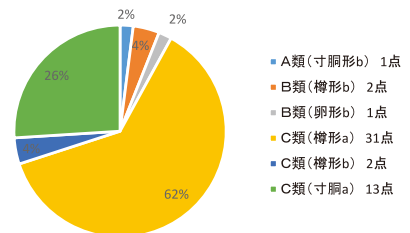


	a	b	c	d
寸胴形				
樽形				
卵形				
提灯形				

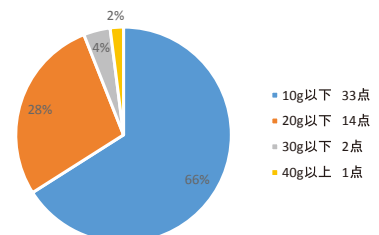
グラフ: 漁撈鍾の種別比率



グラフ: 漁撈鍾の形状比率



グラフ: 漁撈鍾の重さ比率



は合計50点で、土鍾35点（70%）、陶鍾15点（30%）である。

いずれも管状土鍾・陶鍾で、一部を欠損しているものが目立つが、形状は、安岡早穂氏（2018、p.72）の形態分類A類（管状）に属し、さらに形状から「A類・B類・C類」の3種類に分類した。細い形状のC類が大半（90%）を占め、そのうち樽形a（富山県文振団埋文事2007、p.102）に分類できるものが62%を占め、寸胴形aを含めると全体の88%となる。

欠損したものに欠損個所に該当する補正係数を掛けて重さを推定すると、重さ40gまでの軽量のものが全体の98%を占める。内訳では、10gまでの極めて軽量のものが33点（66%）、10gを超えて20g以下のものが14点（28%）、20gを超えて30g以下のものが2点（4%）である。わずかに40gを超えるものが1点（2%）であった。平安時代以降に出現するといわれている重さ100gを超えるような大型の漁撈鍾の出土は認められなかった（5－図14）。

漁撈鍾（土鍾・陶鍾）は、漁網に用いられた鍾で、大型や中型である程度の重量のあるものは曳網や巻網、流水域での刺網、小型軽量のものは止水域での刺網に用いられた可能性が高いと指摘される（大沼芳幸1990、p.289）。今回の調査では小型で軽量のものが大半を占めていることから、止水域での刺網に用いられていたものと考えられ、周辺の河川などで魚を捕るための漁が行われていた可能性が高い。

漁獲の対象については、古代の漁業は捕獲する対象がごく限られたもので、水産加工品が多いことが指摘されており、10世紀に編纂された『延喜式』に見られる諸国からの貢納水産物としては、東海道の尾張国では「年魚（氷魚）・白貝・蛤貝・蛸・凝海藻・^{つ の また}鹿角菜・^{お こ の り}於期菜・塩」の記載がある。白貝・蛤貝・蛸は貝類、凝海藻・鹿角菜・於期菜は海藻類で、川を漁場として捕獲する水産物として、年魚（氷魚）の名が見られる。年魚は鮎で、氷魚は鮎の稚魚と考えられており、淡水魚として最も利用価値が高く諸国各地から貢納されている（福島好和1971、pp.35-58）。

出土した漁撈鍾（土鍾・陶鍾）の量からは、本遺跡における漁撈が盛んな活動ではなかったことが想定されるが、本遺跡においても、年魚（アユ）などが漁獲の対象となっていたことが想像できる。

（基峰）

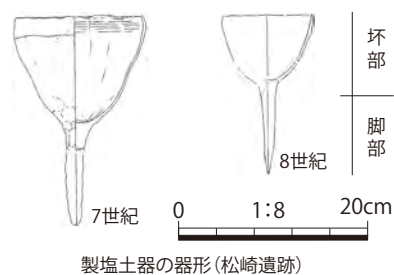
（6）製塩土器について

今回の調査では、1c区から3点（第354図〔写真図版310〕-184、第360図〔写真図版315〕-266、第361図〔写真図版315〕-281）、1d区から5点（第376図〔写真図版329〕-530、第381図〔写真図版333〕-606、第382図〔写真図版334〕-622、第382図〔写真図版335〕-633、第388図〔写真図版341〕-731）、1e区1面から1点（第392図〔写真図版344〕-783）、2b区から1点（第408図〔写真図版357〕-992）、2c区から3点（第423図〔写真図版370〕-1177・1178、第424図〔写真図版371〕-1193）の合計12点の製塩土器が出土した。その内訳は坏部（V字形）1点、坏部（小型）1点、脚部（先尖り）10点で、鉢形の坏部を欠損した脚部の破片が全体の84%を占める。時期は7～8世紀に相当する（5－図15）。

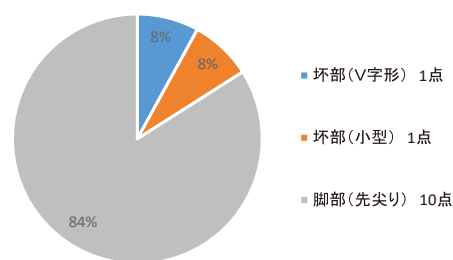
漁撈鍾の項で述べた通り10世紀に編纂された『延喜式』に見られる諸国からの貢納水産物として、東海道の尾張国では「年魚（氷魚）・白貝・蛤貝・蛸・凝海藻・^{つ の また}鹿角菜・^{お こ の り}於期菜・塩」の記載がある。古代尾張国の塩生産は、古墳時代に成立した長脚に鉢形の坏部を載せる製塩土器を使用した伝統的な土器製塩によって、平安時代まで貢納のための調庸塩を含めた塩の生産が行われていたことがわかっている。古墳時代以来の伝統的な土器製塩がその特徴といえる（考古学フォーラム2010、愛知県2010、岸本雅敏2021、pp.42-48）。

出土した製塩土器

番号	図版番号	地区・出土遺構	残存箇所・形状等	時期
1	184	1c区 SB007	脚部（先尖り）	7・8世紀
2	266	1c区 SD061	脚部（先尖り）	7・8世紀
3	281	1c区 SD135	脚部（先尖り）	7・8世紀
4	530	1d区 SI609	脚部（先尖り）	7・8世紀
5	606	1d区 SD075	脚部（先尖り）	7世紀
6	622	1d区 SD201	脚部（先尖り）	7・8世紀
7	633	1d区 SD245	脚部（先尖り）	7・8世紀
8	731	1d区 表土掘削	脚部（先尖り）	6・7世紀
9	992	2b区 SB013	坏部（小型）	8世紀
10	1177	2c区 SI447	脚部（先尖り）	8世紀
11	1178	2c区 SI447	脚部（先尖り）	8世紀
12	1193	2c区 SI667	坏部（V字形）	7世紀後



グラフ：製塩土器の残存部位比率



5－図15 出土した製塩土器と残存部位の比率〔実測図:愛知県2010・p.313 図7〕

本遺跡出土の製塩土器の大半が脚部の先端が先尖りとなる7～8世紀のものであるが、尾張の地域では7世紀初頭以降に先のとがった細身の棒状脚を付けた製塩土器に統一化がなされることがわかっており（立松彰2010、pp.16-17）、松崎遺跡（東海市）から出土した製塩土器などがその全体器形を窺い知ることができる好資料として知られている。土器製塩によって作り出される塩は固形物の塩で、鉢形の坏部を壊して器壁に凝着した塩をそぎ落とすことによって散状塩を得られることから、坏部が既に壊されているために、脚部のみの出土が多い傾向となる。

貢納のための調庸塩は散状塩を俵に詰めて川船などを利用して輸送したと考えられるが、集落にて必要となる塩は製塩土器に入れたまま知多・渥美半島などから運び込まれた可能性が高い。本遺跡から出土した製塩土器は後者のようなものと考えられる。また、古代遠江国の調査事例では、数多くの製塩土器が出土した遺跡は、浜松市の井通遺跡（引佐郡家）や伊場遺跡（敷智郡家）などのように流通などの拠点となる郡（評）家に推定される遺跡に集中する傾向が指摘されている（森泰通2010、p.69）。

本遺跡においても正倉を含めた多くの高床建築の倉庫が確認されていることから、塩を貯蔵した「塩倉」が存在した可能性が考えられる。

（基峰）

（7）土馬について

今回の調査では、1 d 区から5点（第381図〔写真図版333〕-609、第389図〔写真図版341〕-741～744）、1 e 区1面から1点（第392図〔写真図版344〕-783）、2 a 区1面から1点（第398図〔写真図版349〕-870）の合計7点の土馬の脚部（足）が出土した。出土した地区別に見ると、1 d 区に集中しており、5点の出土が確認できた（全体の72%）。いずれも頭部～体部を欠損した脚部（足）だけの破片である。1 d 区の表土掘削と遺構外から出土した2点は、個々の形状は異なるが胴部が中空と

なる作りである。

岩倉市域では平成24（2012）～25（2013）年にかけて実施された中街道遺跡の発掘調査で、胴部が中空の造りである陶馬の胴部1点の出土が知られている。本遺跡から出土した土馬の脚部（足）は4点が遺構外からの出土で、遺構（溝）から出土したものは遺構（溝）の年代観が中世段階に関わる可能性があることから、遺構との関連はないものと考えられ、いずれも時期は8世紀代のものと考えられる（5－図16）。前述の中街道遺跡から出土した陶馬も、遺構（SD6：溝）から出土したものはあるが、遺構（溝）の年代観が中世段階に関わる可能性があることから、本遺跡出土の土馬と同様に、遺構との関連はないものと考えられている（岩倉市教委2013、p.48）。

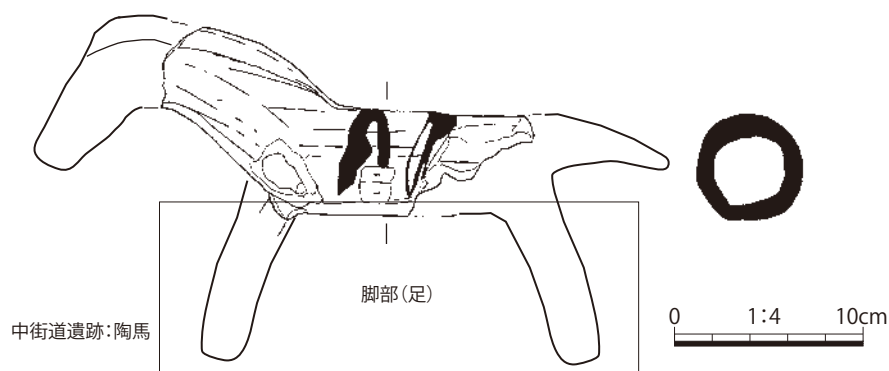
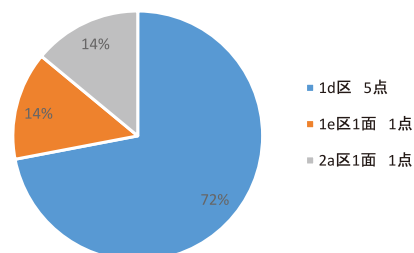
土馬については、『続日本紀』文武2（698）年4月の「奉_レ馬于芳野水分峯神_一。祈_レ雨也」や同年6月の「奉_レ馬于諸社_一祈雨也」などの祈雨に関する記述などから、祈雨祭祀に関わる祭祀具と考えられており、効用を減した祭祀具は破壊し再利用はないものと考えられている（小笠原好彦2015 p.366）。土馬は、脚部（足）などを欠損して出土することがその本質を表しているものと考えられ、壊し流すといった水に関する祭祀具として、溝から出土する傾向が強い。平城京では、水に関連した場所から数多くの土馬が発掘されており、畿内で始まった律令祭祀が、地方社会で定着していたことの現れともいえる。

よって、本遺跡から土馬の脚部（足）のみが1d区から集中して出土したことは、1d区周辺にて

出土した土馬

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	残存箇所・形状等	時期
1	609	土馬	1d区 SD075	脚部（棒状）	8世紀
2	741	土馬	1d区 包含層	脚部（棒状）	8世紀
3	742	土馬	1d区 遺構外	脚部（棒状）	8世紀
4	743	土馬	1d区 表土掘削	脚部（胴部中空）	8世紀
5	744	土馬	1d区 遺構外	脚部（胴部中空）	8世紀
6	783	土馬	1e区1面 SD038	脚部（棒状）	8世紀
7	870	土馬	2a区1面 SD004	脚部（棒状）	8世紀

グラフ：土馬の出土地区別比率



5－図16 出土した土馬と出土地区別比率・土馬復元図 [実測図：岩倉市教委2013・p.59 第29図に加筆]

祈雨祭祀や河川祭祀などが行われ、その祭祀具として使用された後の姿といえよう。

(基峰)

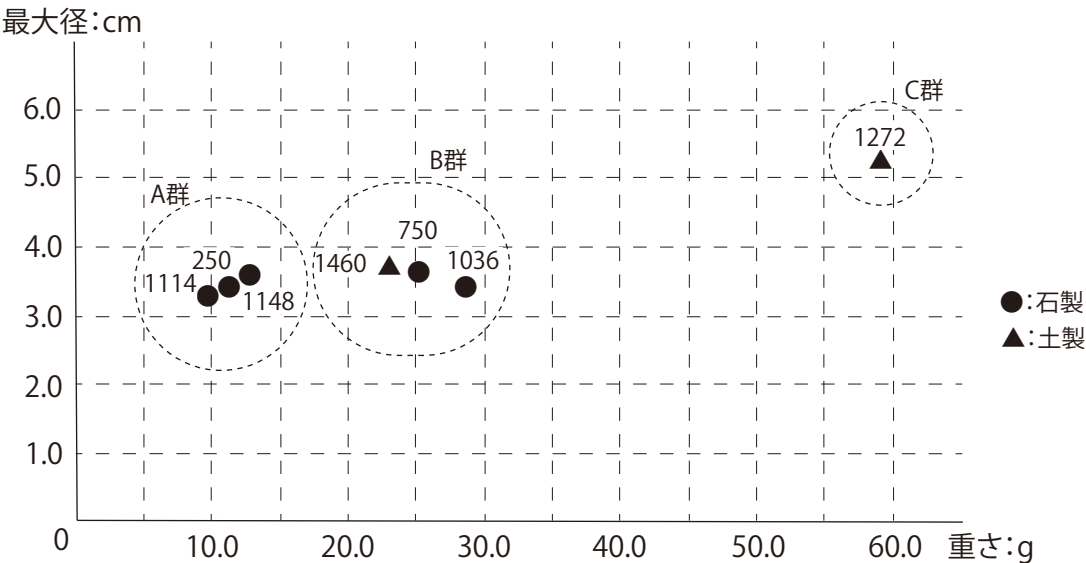
(8) 紡錘車について

今回の調査では、1 c 区から 1 点 (第359図 [写真図版314] -250)、1 d 区から 1 点 (第389図 [写真図版341] -750)、2 b 区から 3 点 (第412図 [写真図版360] -1036、第418図 [写真図版365] -1114、第420図 [写真図版368] -1148)、2 c 区から 1 点 (第429図 [写真図版376] -1272)、R d 区から 1 点 (第443図 [写真図版388] -1460) の合計 7 点の紡錘車 (紡輪部分) が出土した。1 c 区・1 d 区・2 b 区出土の 5 点は石製、2 c 区・R d 区出土の 2 点は土製である。2 b 区出土の1036と R d 区出土の1460の表面には斜文による装飾が施されている。

欠損したものに欠損個所に該当する補正係数を掛けて重さを推定し、紡錘車の紡輪個々の最大径と重さを比較したところ、最大径約3.5cm前後で重さ15g以内に収まる軽量の A 群と、最大径約3.5cm前後であるが重さ20～30gに収まる B 群、そして最大径約5.0cmを超えて重さ60gに近い重量のある C 群に分かれた。C 群の1272は古墳時代のもものと推定され、時期的にやや古いものと考えられるが、A 群・B 群はいずれも 7～8 世紀を中心としたものと考えられる (5 - 図17)。

雑駁ではあるが、紡錘車の紡輪部分が 7 世紀前後に、土製から石製へと変化した様相が窺える。また、軸孔は直径0.6～0.7cmとほぼ規格化された大きさであることから、紡錘車の紡輪に差し込まれた紡茎の規模には差が無かったことも窺える。A 群・B 群の相違については、紡ぐ糸 (繊維) の差を反

出土した紡錘車									
番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	最大径×高さ cm	孔径 cm	重さ g	重さ補正	時期	備考
1	250	石製 (安山岩)	1c区 SK868	3.5×0.6	0.6	(11.3)	残存×1.1倍	6世紀後～7世紀中	
2	750	石製 (石灰岩)	1d区 表土掘削	3.6×1.4	0.7	25.5	—	7・8世紀	
3	1036	石製 (滑石)	2b区 SI416	3.4×1.5	0.7	28.9	—	7世紀	斜文
4	1114	石製 (滑石)	2b区 SP566	(3.3) × 0.9	(0.7)	(10.0)	残存×2倍	7・8世紀	
5	1148	石製 (礫岩)	2b区 包含層	(3.6) × (1.0)	(0.7)	(13.6)	残存×4倍	7・8世紀	
6	1272	土製	2c区 遺構外	5.2×2.4	0.6	59.5	—	5世紀	
7	1460	土製	Rd区 SX163	(3.8) × 1.5	(0.5)	(23.8)	残存×2倍	7世紀	斜格子文



5 - 図17 出土した紡錘車の最大径・重さの分類

映したものと考えることができる。

(基峰)

(9) 須恵器短頸壺・四耳壺について

今回行った調査において2c区の包含層からはほぼ完形の葉壺形の須恵器小型短頸壺(第429図[写真図版376]-1267)1点が出土した。口径5.0cm、高さ6.1cmと小型で、後世の薬師如来像の左の手のひらに持つ葉壺のようである。この小型短頸壺の外面には降灰や自然釉が見られ、器形や成形などから8世紀末頃～9世紀初頭頃の年代が想定される。下田南Ⅴ期に相当する遺物で、集落活動が最盛期を過ぎたころに該当する。

他地区から出土した須恵器小型短頸壺ないしは鉢に相当する器形で、図化できたものは6点(第351図[写真図版307]-145、第361図[写真図版316]-292、第369図[写真図版323]-417、第372図[写真図版326]-473、第399図[写真図版350]-899、第415図[写真図版363]-1067)であるが、いずれも体部が坏身や埴に類似するやや古い器形で、2c区包含層出土の小型短頸壺(1267)よりも古い時期に相当する。いずれも器形や成形などから7世紀前半～後半の遺物と考えられ、下田南Ⅲ・Ⅳ期に相当する。2c区包含層出土の小型短頸壺(1267)は、本遺跡出土の遺物としては稀有なものといえる。

次に口径が10.0～15.0cm程度となる大きさの一般的規模の須恵器短頸壺を見ると、図化できたものは7点(第352図[写真図版308]-152、第354図[写真図版310]-181、第363図[写真図版318]-332、第390図[写真図版343]-756、第400図[写真図版351]-902、第416図[写真図版364]-1082、第422図[写真図版369]-1165)であった。1c区S B 007出土の短頸壺(181)は口径24.2cmと大振りで、大甕に相当する器形である。また1e区1面S D 002出土の短頸壺(756)は口縁部が内傾する器形で、2a区1面包含層出土の短頸壺(902)は残存部が体部のみであるため長頸壺となる可能性がある。2b区S K 426出土の短頸壺(1082)は口縁部がやや甕に類似し、2c区S I 240出土の短頸壺(1165)は口径が7.4cmとやや小さめで肩が張る器形となる。いずれも器形や成形などから7世紀中頃～8世紀中頃の時期と考えられる遺物で、下田南Ⅲ期末～Ⅳ期に相当する。

なかでも1b区表土掘削の際に出土した短頸壺(152)は体部上半(肩より上方)に耳を持った四耳壺で、口径は12.4cmを測る。本来は有蓋であった可能性が高いと考えられ、尾張の地域では同規模で同様の器形の須恵器四耳壺が藤山台9丁目遺跡(春日井市)などから出土している。藤山台9丁目遺跡出土の四耳壺は、火葬墓の骨蔵器として使用されたもので、同様に須恵器四耳壺が火葬墓の骨蔵器として使用された例として、春日井市出川町出土のものが知られている。出川町出土の四耳壺は、藤山台9丁目遺跡出土の四耳壺よりも大振りの器形で高台を欠いているが有蓋で、今回の調査で出土した須恵器四耳壺(152)の器形などを考えるうえで参考例となる。藤山台9丁目遺跡・出川町出土の四耳壺はいずれも高蔵寺2・3号窯(春日井市)で8世紀初頭に生産されたものと考えられており、尾張の地域では、8世紀初頭～前半にかけて有蓋四耳壺(短頸壺)を骨蔵器として使用した火葬墓が出現する(愛知県2010、pp.216-217)。また、灰釉陶器の有蓋短頸壺が塔の越遺跡(稲沢市)から出土しており、本遺跡出土の須恵器短頸壺の器形や特徴などを考えるうえで参考となる(5-図18)。

今回の調査で出土した壺蓋で図化できたものは3点(第351図[写真図版307]-141、第327図[写真図版330]-549、第440図[写真図版385]-1416)である。特に1d区S I 795から出土した壺蓋(549)は口径8.2cm、器高4.7cmと高さを有する器形で、天井には宝珠形のつまみが付いている。器形や成形などから7世紀後半の遺物と考えられる。前述の須恵器四耳壺(152)より小型でやや古い時期のもので、須恵器四耳壺(152)の蓋としては、時期や大きさから考えて1b区S D 243出土の壺蓋(141)

出土した須恵器小型短頸壺(鉢)

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ c m	時期	備考
1	145	短頸鉢	1b区 SP070	(9.4) × (3.5)	7世紀後	
2	292	短頸壺	1c区 SD288	(8.2) × (4.1)	7世紀前半～中	
3	417	短頸壺	1c区 SP006	(10.8) × (4.3)	7世紀前	自然釉
4	472	(短頸壺)	1c区 包含層	(7.8) × (4.4)	7世紀後	
5	899	(短頸壺)	2a区1面 遺構外	(5.8) × (5.5)	7世紀前	
6	1067	短頸鉢	2b区 SK179	(9.5) × (4.0)	7世紀前半～中	
7	1267	短頸壺	2c区 包含層	5.0×6.1	8世紀末～9世紀初	降灰・自然釉

出土した須恵器短頸壺

番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ c m	時期	備考
1	152	短頸壺	1b区 表土掘削	(12.4) × (3.8)	8世紀前	
2	181	短頸壺	1c区 SB007	(24.2) × (4.4)	7世紀後～8世紀	
3	332	(短頸壺)	1c区 SD512	(14.0) × (5.1)	7世紀後～末	
4	756	短頸壺	1e区1面 SD002	(11.0) × (5.0)	7世紀中	
5	902	短頸壺	2a区1面 包含層	- × (8.3)	7世紀後	
6	1082	短頸壺	2b区 SK426	(9.4) × (2.8)	8世紀中	降灰
7	1165	短頸壺	2c区 S1240	(7.4) × (5.3)	8世紀前	

出土した須恵器壺蓋

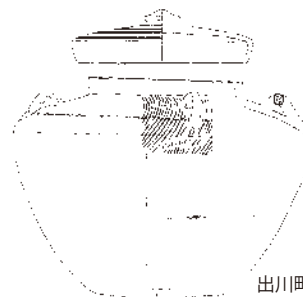
番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ c m	時期	備考
1	141	壺蓋	1b区 SD243	(12.8) × (2.8)	8世紀	
2	549	壺蓋	1d区 S1795	(8.2) × 4.7	7世紀後	
3	1416	壺蓋	Rb区1面 遺構検出面	(10.4) × (1.5)	7世紀中	

出土した須恵器短頸鉢

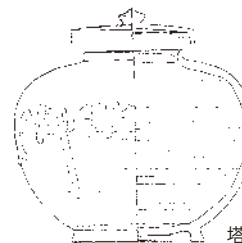
番号	図版番号	種別	地区・出土遺構	口径×高さ c m	時期	備考
1	334	短頸鉢	1c区 SD512	(16.0) × 13.7	7世紀後～8世紀初	
2	1124	短頸鉢	2b区 SX163	(10.8) × (7.9)	7世紀	
3	1390	短頸鉢	Ra区 SD001	(15.0) × 9.8	8世紀前	



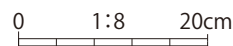
藤山台9丁目遺跡



出川町出土



塔の越遺跡



須恵器四耳壺・灰釉陶器有蓋短頸壺

5-図18 出土した須恵器短頸壺(鉢)と周辺出土の有蓋四耳壺(短頸壺)

[実測図: 愛知県2010・p.154 図4、p.127 図2]

のようなものであった可能性が高いといえる。

最後に、須恵器短頸壺に類似する器形として須恵器短頸鉢について記したい。今回の調査によって出土した須恵器短頸鉢で図化できたものは3点(第364図[写真図版318]-334、第419図[写真図版366]-1124、第439図[写真図版383]-1390)である。器形や成形などから7世紀後半～8世紀前半の遺物と考えられ、下田南Ⅳ期に相当する。器形から須恵器短頸壺と同様の用途で使用された可能性が考えられる。

(基峰)

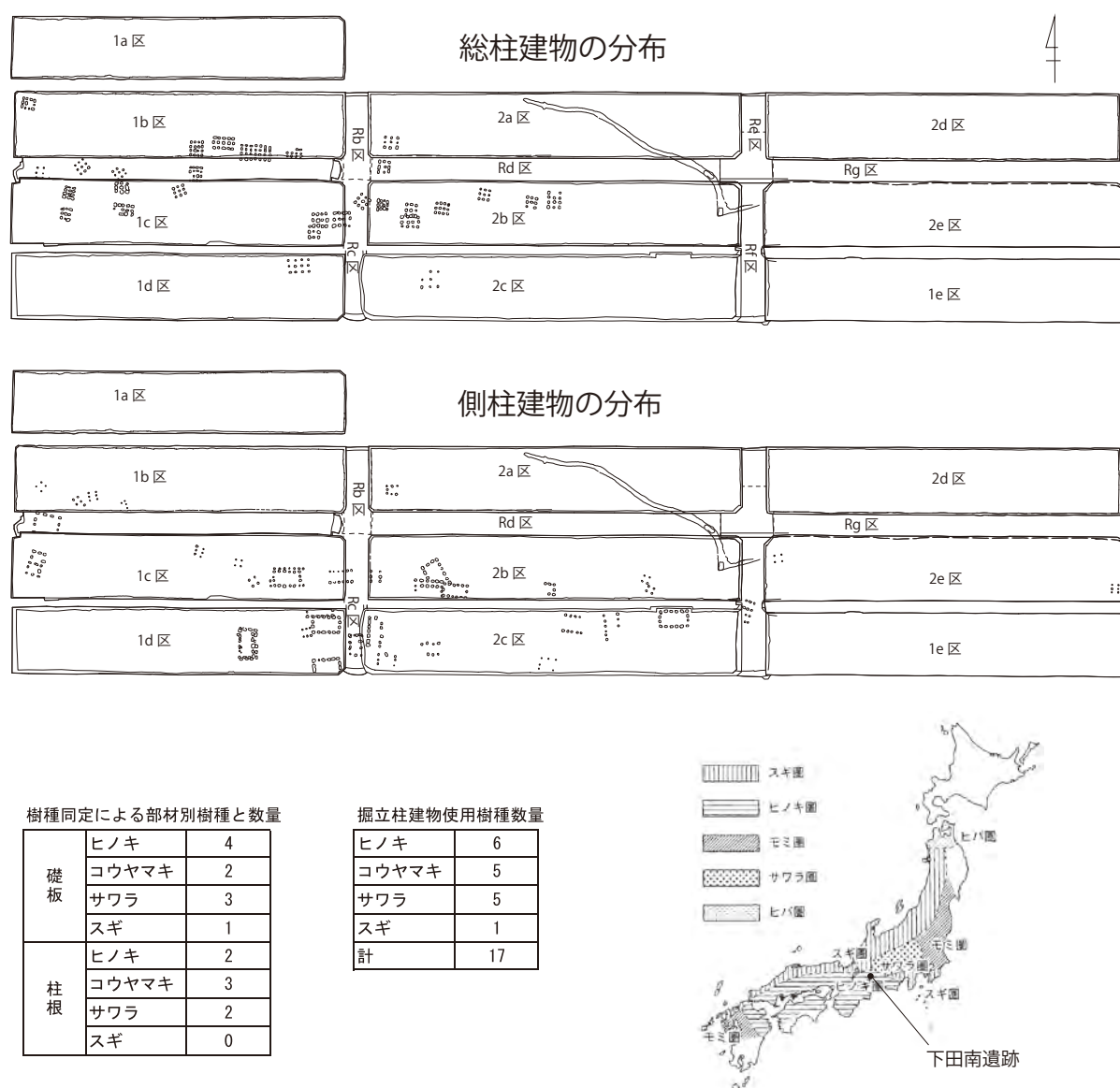
(10) 掘立柱建物出土の礎板・柱根について

今回の発掘調査で、掘立柱建物の柱穴から出土した建築部材(木製品)の一部分である礎板と柱根についてまとめたい。

本遺跡では総柱ないしは側柱構造の掘立柱建物が多数確認できた。このうち17棟の建物から礎板と柱根の出土が認められた。礎板・柱根は、出土した際に既に形状が崩れているものもあったが、礎板の形状はいずれも長方形の板材と推定でき、なかには不明瞭ながらも加工痕を残すものも確認できた。

本遺跡での主要な掘立柱建物の分布を見ると、調査区域の中央より西側に建物が集中することがわかる。調査区域の中央付近に2 a区2面S D166といったR f区まで続く多数の土器群を出土した下田南Ⅲ期（6～7世紀中頃）を中心とした長狭な溝が見られ、この溝から東側には建物遺構が見られず、2 a区2面S D166を境界としてその西側を生活域の中心と定めて建物が建築されていたと考えられる。構造に注目すると、総柱構造の掘立柱建物は調査区域の西側北寄りに多く分布し、1 c区～2 b区にかけての範囲に最も多くみられる。一方、側柱構造の掘立柱建物は調査区域の中央南寄りに多く1 c区・1 d区・2 b区・2 c区・R c区にかけて分布する（5－図19）。

掘立柱建物の柱穴出土の礎板は、一枚の板材を柱穴の底面に敷くか、複数の板材を重ねた状態で出土している。後者の複数の板材を重ねた状態の建物はいずれも3間×3間以上の規模の総柱建物であるが、同じ建物でも個々の柱穴によって一枚の板材を使用したものと、複数の板材を重ねたものが見



5－図19 主要な掘立柱建物の分布と礎板・柱根に使用された樹種（建物分布図1：2500）

[下段図：弥生時代から古代にかけて各地域でもっとも利用された針葉樹の樹種 鈴木三男2012 p.98.に加筆]

られ、支柱となる柱の高さ調整を行うために複数枚重ねて使用したものと考えられる。一方、出土した柱根はいずれも柱穴の底面に直接設置されたもので、礎板を下敷きとした礎板と柱根がセットとなって出土したものは認められなかった。

礎板・柱根は樹種同定の結果によれば、ヒノキ、サワラ、コウヤマキが多く使用され、スギの使用が少ないことがわかった（第4章第5節・第11節参照）。ヒノキは愛知県内出土の建物の柱材としてよく使用されているもので、本遺跡出土の傾向と一致するが、本遺跡の建物では、水湿に強いコウヤマキやサワラが使用されていることが特徴として指摘できる。本遺跡での建物では、建築部材（木製品）として加工の容易さに加えて、ある程度水湿に強い木材が選ばれていたと考えられる。

以上のとおり、本遺跡の掘立柱建物では礎板・柱根にコウヤマキやサワラが使用されているという特徴が認められたが、建築部材の中心はやはりヒノキであったと考えられよう。想像となるが、本遺跡への建築部材となる木材の運搬については、地域の河川を活かした水上運搬であった可能性が考えられよう。

（後藤泰）

（11）墨書土器について

今回の調査によって17点の墨書土器が出土した。内訳は1 c 区から2点、1 d 区西側から2点、東側から9点、2 b 区から1点、2 e 区1面・2面から3点である。出土した墨書土器の種類は須恵器が2点、灰釉陶器が1点、山茶碗14点で器種は坏身・灰釉皿・碗・小皿で小皿と碗が最も多く7点である。墨書が書かれていた場所はほとんど外面底部で、文字数はほとんど1文字で底面のほぼ中央に書かれている（5－図20）。

1は漢数字の「一」のような文字が書かれていると考えられる。2は破片であるためどの部分にどんな文字が書かれてあったのか不明だが須恵器の坏身体部であると推測する。3は灰釉皿の底面に書かれている。文字は「可」のようなくずした文字が書かれている。4と5は文字の判断は不可能である。6は「大」である。7は「井」か「土」のような文字が書かれている。8は「大」である。9は底部が欠損しているため文字の解読は不可能だが、2本の線が書かれていることがわかる。10は「大」のような文字、11は記号のような文字が書かれてある。12は欠損しているため文字の詳細は不明だが、出土した遺物から推測すると「大」ではないかと思われる。13は「大」か「イ」の文字が考えられる。14は「平」という文字か「土」と「下」か「十」と「下」が上下に組み合わせてある文字、または「井」のように見える。15は「下」という文字だと考えられる。16は漢数字の「一」と考えられるが、底部が欠損しているため詳細は不明である。17は欠損しているが形から推測すると「大」のような文字だと思われる。

遺物の年代は1が7世紀前半～中頃、2は7～8世紀、3が9世紀後半。11は12世紀中頃、15は12世紀後半～13世紀前半、8・9・12は13世紀後半～14世紀前半。13・16は14世紀前半、4・5は14世紀前半～中頃、10・14・17は14世紀中頃、6・7は15世紀前半と考えられる。

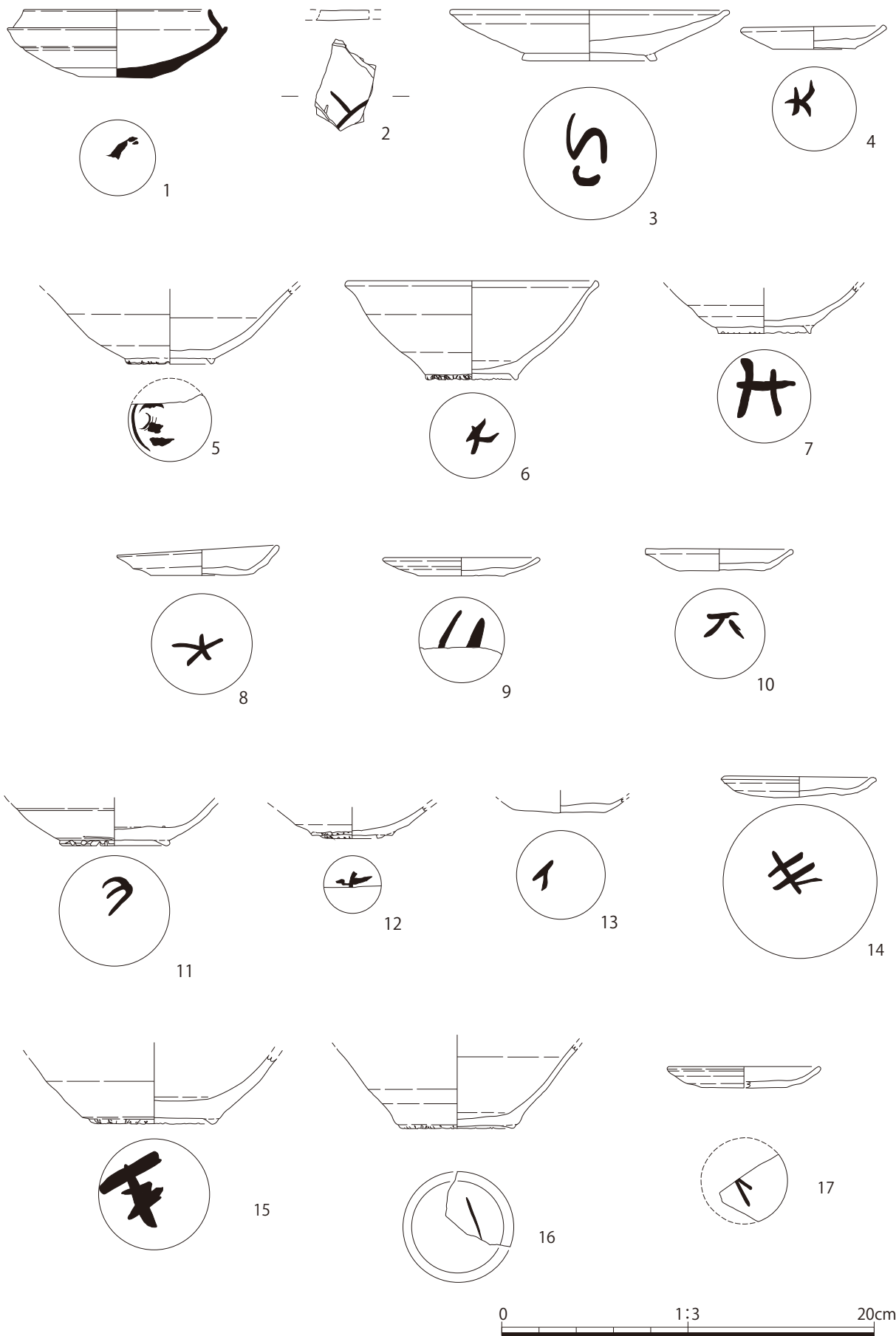
今回の調査で出土した墨書土器は、「大」やそれに類似した文字が多く書かれていた。『和名類聚抄』によれば本遺跡は尾張国丹羽郡に属しており、丹羽郡の郷名として「大桑郷」という名称がある。しかし『古代地名大辞典』（1999）によれば、「大桑郷」は『地理志料』によると現在の犬山市楽田地区、『地名辞書』によると江南市古知野町一帯から一宮市瀬部にかけて、『愛知県郡町村字名調』によると江南市山尻付近とされている。いずれもが本遺跡から離れているため、「大桑郷」との関連は考え難い。「大」やそれに類似した文字の多くは、吉祥句としての意味合いが強いと考えられることから、「大」

には「はなはだしい」ことや、「盛んである」こと、または「そのさま」という意味があり、繁栄の願いを込め書かれたものといえよう。7は「土」とも読み取れるが、「井」の可能性が高いと思われる。「井」には「製品を単位ごとに管理し、識別し得る方法」(愛知県埋文セ1987、p.75.) という意味がある。底部には重ね焼きをした痕があったことから、製品管理の為に書かれたものの可能性が高い。15に書かれていた「下」と思われる文字については、同じく丹羽郡に「下沼郷」がある。現在の一宮市丹陽町三ツ井に該当する地域と考えられ、本遺跡から北西約3.0kmのところに三ツ井遺跡(一宮市)がある。しかし、本遺跡から北西約900mに位置する権現山遺跡(岩倉市)では、下沼郷に関する墨書土器の記述が見られないことから、地名と判断することが難しく別の意味があったと考えられる。

出土した墨書土器は、溝から多く出土したものである。また、残存状態の良いものは日常生活で使

	土器種別	器種	位置	文字	出土地点	時期
1	須恵器	坏身	外面底面	—	1c区 SD074	7世紀前半～中頃
2	須恵器	坏身か	外面体部か	?	1c区 遺構外	7世紀～8世紀
3	灰釉陶器	灰釉皿	外面底面	可?思?	1d区 SD089	9世紀後半
4	山茶碗	椀	外面底面	?	1d区 SD254	14世紀前半～中頃
5	山茶碗	椀	外面底面	大	1d区 SD255	14世紀前半～中頃
6	山茶碗	椀	外面底面	?	1d区 SD254	15世紀前半
7	山茶碗	小皿	外面底面	?	1d区 SD254	15世紀前半
8	山茶碗	小皿	外面底面	大	1d区 SD254	13世紀後半～14世紀前半
9	山茶碗	小皿	外面底面	大?	1d区 SD254	13世紀後半～14世紀前半
10	山茶碗	椀	外面底面	井?土?	1d区 SD0051	14世紀中頃
11	山茶碗	椀	外面底面	?	1d区 SD0051	12世紀中頃
12	山茶碗	小皿	外面底面	大	1d区 SD0051	13世紀後半～14世紀前半
13	山茶碗	小皿	外面底面	大?イ?	1d区 遺構外	14世紀前半
14	山茶碗	小皿	外面底面	土と下? 平?井?	2b区 SD080	14世紀中頃
15	山茶碗	椀	外面底面	下?	2e区1面遺構外	12世紀後半～13世紀前半
16	山茶碗	椀	外面底面	—?	2e区1面 遺構外	14世紀前半
17	山茶碗	小皿	外面底面	?	2e区2面 SD049	14世紀中頃

5－表3 出土した墨書土器一覧表



5-図20 出土した墨書土器

用され、残存状態が悪いものは祭事などの一時的なものに使われた可能性が考えられる。

(首藤)

(12) 山茶碗について

山茶碗は、本遺跡では多くが溝から出土している。時期は、12～15世紀を中心とする。山茶碗の生産は、愛知県の瀬戸・猿投・常滑にて尾張型（南部系）、岐阜県の土岐・多治見と近接する瀬戸の地域にて東濃型（北部系）が知られている。

山茶碗の生産と流通については、常滑・東濃産は庄内川を搬入経路として流通するが、常滑では13世紀後半に生産が終了し、甕が生産の中心となる。一方、庄内川左岸の瀬戸・猿投産は川を超えることが運搬上の支障になって流通が減り、猿投では14世紀初頭に生産が終了となる。このような過程において、東濃型（産）の流通が増えるが、瀬戸産も15世紀中頃まで生産が継続されるため、13世紀後半以降にも数量は減少するが、本遺跡周辺への流通もなされている（藤澤良祐1990）。生産の終焉は、尾張型・東濃型ともに15世紀後半となる。

庄内川右岸の本遺跡周辺における山茶碗の出土傾向は、瀬戸産は少なく、猿投・常滑・東濃産が占めるのが一般的で、13世紀中頃以降は東濃産がほぼ全体を占めるようになる。本遺跡でも、周辺とはほぼ同様の傾向を示しており、10世紀中頃（東山72号窯式・百代寺窯式）～12世紀前半（瀬戸第3型式）の出土量は少なく、12世紀中頃になると猿投・常滑産の尾張型の出土数が多くなる。13世紀中頃～14世紀になると、東濃型の出土数が多くなり尾張型の出土数を凌駕するようになるが、15世紀以降は出土数が減少する。

次に山茶碗の使用痕についてみておきたい。尾張型の内面、特に底部内面に使用による摩滅が見られるものが多く確認できた。東濃型については緻密な胎土が用いられているためか、または摩滅により滑らかになっているのか、もともと滑らかなのか判別が難しかった。また本遺跡から出土した山茶碗は底部のみのものが多く、口縁部まで残っているものは少なかったが、体部外面が摩滅していたものは見当たらなかった。山茶碗内面の摩滅（使用痕）については、播鉢のように使用していたとも考えられており（武部真木2006）、確かに何かを摺るような作業をしなければ、荒れた山茶碗内面の表面が滑らかにはならないと考えられる。山茶碗の生産減少については、「摺る」道具に特化した播鉢・卸皿の生産がその背景にあったとも考えられよう。

また、今回の調査で出土した山茶碗の底部外面には、尾張型・東濃型ともに判読不明ではあるが墨書が認められるものがあつた（前項参照）。

(後藤秀)

(13) 1 a 区出土の賽子（サイコロ）について

ここでは、1 a 区から出土した賽子（以下、サイコロと記す）についてまとめた。

出土したサイコロ（第346図〔写真図版303〕-74）は、素焼きの土製品で、成形は手づくねで、形状は不整形の六面体である。時期は13～16世紀頃と推定され、表裏の目の和が必ず「7」になる。3・4の目に黒色、2・5の目に赤色の着色が施され、1・6の目には着色がなされていない。

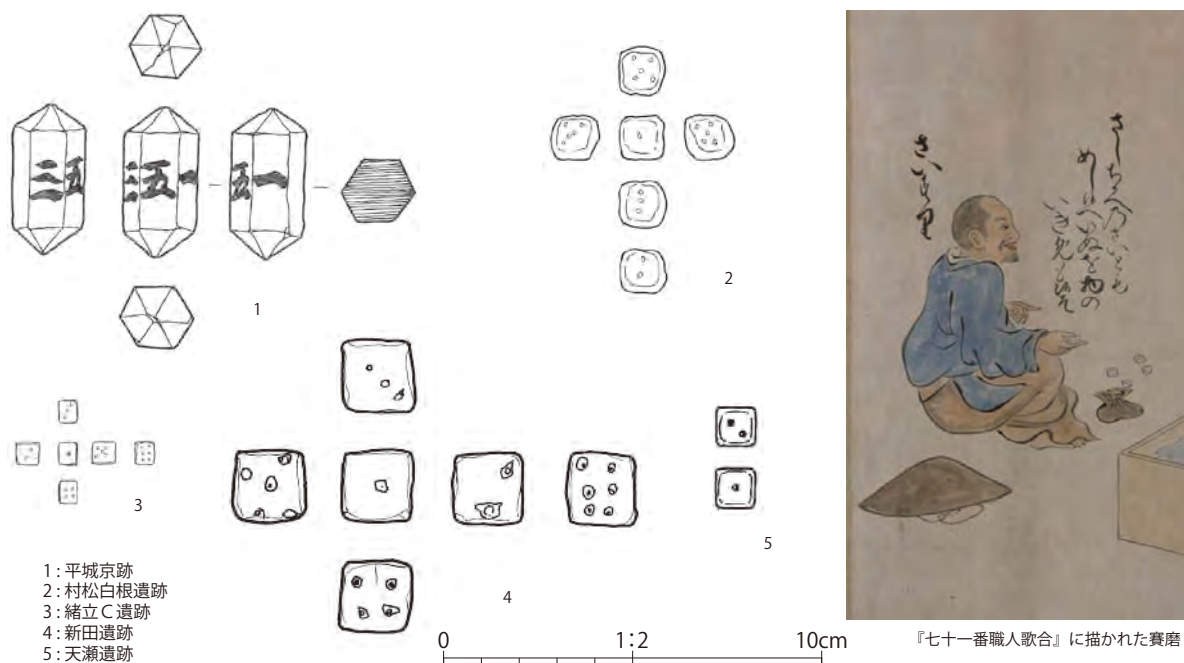
日本におけるサイコロは、奈良時代以前に中国から伝わったと考えられており、奈良県の正倉院（奈良市）には、聖武天皇が所有した象牙製のサイコロとサイコロ遊戯盤が所蔵されている。増川宏一氏によれば、7・8世紀に日本ではかまぼこ状の「朝鮮型」・「投げ棒型」・「立方体」の3つの型のサイコロが並存していたと考えられている（増川宏一1992）。サイコロの出土は全国的に認められるもので、国内で出土したサイコロの形状は、現在でも一般的な正六面体のほかに投げ棒状や多角柱のものなど

がある。代表例としてよく知られる奈良県の平城京跡（奈良市）から出土したサイコロは、立方体や多角柱の木製である。また福岡県の大宰府跡（太宰府市）などの上級地方官衙遺跡からの出土例が多く知られており（大塚初重1998）、本遺跡の周辺では、三重県の斎宮跡（多気郡明和町）からサイコロ状土製品の出土が知られている（斎宮歴史博物館1997）。

サイコロの材質には木製・骨角製・石製・土製などがあり、サイコロの目は表面にくぼみを作るもののほか、線刻や墨書で数字を記すものがある。前述の平城京跡出土の多角柱のサイコロの目には、漢数字が墨書されている。またサイコロの目の数の割り付けについては、古代には曖昧であったと考えられており（山村信榮1998）、茨城県村松白根遺跡（那賀郡東海村）から出土したサイコロでは、表裏の目の和が7にならないものが確認されている（茨城県教育財団2007）。

一方、本遺跡から出土したサイコロに類似する出土例としては、新潟県緒立C遺跡（新潟市）から出土した骨製もしくは角製のサイコロや、茨城県新田遺跡（猿島郡五霞町）から出土した石製（角閃石）のサイコロと大分県満月寺跡（臼杵市）から出土した素焼き土製のサイコロといった表裏の目の和が「7」になるサイコロがある（黒埼町教委1993、茨城県教育財団2015、臼杵市2019）。また岡山県天瀬遺跡（岡山市）から出土した石製（長石）のサイコロでは、目に赤色顔料が詰められたものがある（岡山県教委2001）。

本遺跡から出土したサイコロは六面体で、中近世の遺跡から出土したサイコロに類似例が多く見られるものである。目の彩色については、目の一部のみに彩色が残るのみで、これが製作時からのもので、彩色の際に区別するために彩色する箇所と彩色しない箇所を分けたのか、あるいは後世に一部分だけが彩色されたものかは不明である。中世になると『七十一番 職人歌合』に、賽磨と呼ばれるサ



5-図21 各地出土の賽子（サイコロ）と中世の賽磨（職人）

[1：館野和己・和田萃1989・p.24、2：茨城県教育財団2007・p.17 第12図、3：黒埼町教委1993・p.11 第6図、4：茨城県教育財団2015・p.72 第63図、5：岡山県教委2001・p.79 第75図 賽磨：東京国立博物館提供]

イコロ職人が描かれており、中世以降になるとサイコロを用いた遊戯は広く一般に普及していたことが想定できる。本遺跡でもサイコロ遊戯が行われていたことは確かといえよう。

(後藤泰)

(14) 1 e 区 1 面出土のウマについて

1 e 区 1 面の遺構検出の際に、調査区の東側からウマの歯（第393図 [写真図版345] -805）が出土している。出土した層位から、鎌倉時代以降の可能性が考えられる。

ここでは若干の考察を行いたい。自然科学分析の結果、本資料はウマの上顎臼歯と判明した。1 点のみの出土のため年齢・性別・体高の特定には至らなかった。また周辺では、御山寺遺跡（岩倉市）から本遺跡同様にウマの上顎臼歯の出土が知られている（愛知県埋文セ2011）。

本遺跡では、2 c 区から4 棟（2 c 区 S B 003・2 c 区 S B 005・2 c 区 S B 006・2 c 区 S B 007）、R c 区と 1 b 区の隣接部分から1 棟（R c 区 S B 004）の牛馬などの家畜小屋と想定される建物が検出されている。時期は、2 c 区 S B 003は7 世紀後半～8 世紀前半、2 c 区 S B 005～2 c 区 S B 007は7 世紀後半～8 世紀中頃、R c 区 S B 004は7 世紀後半～末頃である。いずれも糞尿溝（溜め）などの存在は確認できないが、東西又は南北に細長い建物型式で、桁行柱間の間隔が狭小であることから、馬小屋の形態に類似する(篠崎譲治2010)。また、愛知県内では権六遺跡（知多郡美浜町）から13世紀前半～中頃の馬小屋と思われる掘立柱建物（14B区 S B 04）が検出されている（愛知県埋文セ2017）。本遺跡の方が建物の規模は大きい、同構造の建物であり、馬小屋などであった可能性が考えられる（5－図22）。

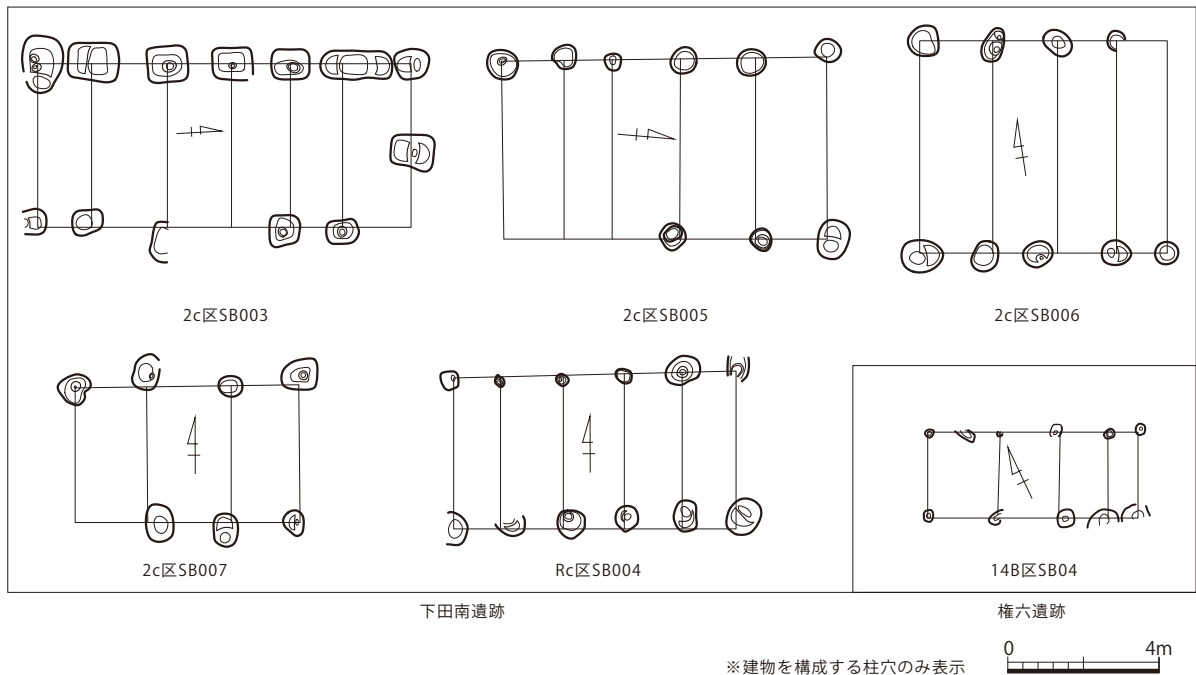
馬は古代から騎馬用・荷役用・耕作用などに利用されてきた。本遺跡でも古代～中世にかけて、荷の運搬や農耕などに用いられていたと考えられる。

(三島)

遺跡名	調査地区	遺構番号	規模				構成			時期
			長軸(桁行)	短軸(梁行)	深さ	平面	柱間規模	柱間間隔(桁行)	柱間間隔(梁行)	
下田南遺跡	2c	SB003	10.30	5.20	0.50	長方形	6×2(1)	1.50	2.20 (4.40)	7世紀後半～8世紀前半
	2c	SB005	9.40	5.70	0.15	長方形	5×1	1.80	4.70	7世紀後半～8世紀中頃
	2c	SB006	7.30	6.40	0.30	長方形	4×1	1.50	5.50	7世紀後半～8世紀中頃
	2c	SB007	6.80	4.80	0.44	長方形	3×1	1.80	4.00	7世紀後半～8世紀中頃
	Rc	SB004	7.46	3.95	0.50	長方形	5×1	1.51	3.95	7世紀後半～末頃
権六遺跡	14B	SB04	5.50	2.20	0.55	長方形	4×1	1.30	2.20	13世紀後半～中頃

※単位(m)

5－表4 下田南遺跡と権六遺跡の馬小屋と想定できる建物一覧



5－図22 下田南遺跡と権六遺跡の馬小屋と想定できる建物（1：200）
 [権六遺跡：愛知県埋文セ2017・p.29 図27]

第3節 まとめ

下田南遺跡の発掘調査成果からは、主に古墳時代～中世（下田南Ⅰ期～Ⅷ期）に至るまでの集落としての変遷過程が確認できた。

発掘調査で確認できた建物を中心とした主要な遺構は、古墳時代以前（下田南Ⅰ・Ⅱ期）ではSⅠ（竪穴建物）1棟、SK（土坑）2基、SX（不明遺構）1基であるが、飛鳥～平安時代（下田南Ⅲ期～Ⅵ期）にかけては最も多くの遺構が確認でき、SB（掘立柱建物）62棟、SⅠ（竪穴建物）69棟、SK（土坑）32基、SX（不明遺構）18基ほどであった。中世以降（下田南Ⅶ・Ⅷ期）になると、SK（土坑）29基が認められた。SD（溝）とSP（ピット）は各時期にわたって数の増減はあるが普遍的に存在する。特にSD（溝）については、中世以降（下田南Ⅶ・Ⅷ期）になると全調査区を並走して横断する規模の大きなもの（道路側溝）や方形区画を呈するもの（屋敷溝）などその規模が大きくなっている。

発掘調査成果として特に注目できるのは、6～7世紀中頃（下田南Ⅲ期）に入り集落の営みが急激に成長し、7世紀後半～8世紀中頃（下田南Ⅳ期）になると郡家（評家）の出先機関と推定される地方官衙遺跡の一部（郷の中心的施設）として機能していたことが推定できたことである。

しかしながら8世紀後半～9世紀（下田南Ⅴ期）の状態を見ると、前代（下田南Ⅳ期）で見られた地方官衙遺跡としての性格は消滅し、継続しなかったことが窺い知れる。この原因としては、国司ないしは郡司からの命令や、有力豪族（氏族）の衰退ないしは他の有力豪族（氏族）の台頭などによる郡内（地方行政）の再編、または洪水などの自然災害によって土地を放棄し得ない状況などが要因として想像できるが、詳らかではない。『続日本紀』天平宝字7（763）年9月詔の「疫死多レ数、水旱不レ時。神火屢至、徒損ニ官物一。此者、国郡司等不レ恭ニ於国神一之咎也。」といった東国で多発した神火などもその要因のひとつとして想像できる。

諸国の郡家（評家）と推定される遺跡の多くが、7～10世紀の長期間にわたって営まれた官衙遺跡であるが、本遺跡では8世紀後半以降になると集落としての営みが急激に衰退することが特徴であり、短期間に営まれた官衙的施設といえる。このことが木簡・墨書土器などの文字資料の出土が極端に少ない原因としても考えられる。

また郡家（評家）と地方寺院が近接して発掘される事例が多いことから、郡家（評家）の周辺に寺院が建立されていたことは一般的な現象といえ、本遺跡と川井薬師堂廃寺とは一連の遺跡として理解することが望ましいと考えられる。さらに旧五条川との関連も本遺跡の立地やその成立背景を考えるうえで重要である。

今後は、川井薬師堂廃寺の発掘成果や、旧五条川との位置関係などを含めて本遺跡の検討が行われていくことが課題と考えられ、岩倉市域を中心とした当該地域の歴史像を理解するうえで、「下田南遺跡群」として発掘調査成果が検討・究明されていくことを期待したい。

（基峰）

【引用・参考文献】（第4章以外）

- 愛知県 2002『愛知県史』資料編1 考古1 旧石器・縄文
- 愛知県 2003『愛知県史』資料編2 考古2 弥生
- 愛知県 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳
- 愛知県 2010『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～古代
- 愛知県 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系
- 愛知県 2016『愛知県史』通史編1 原始・古代
- 愛知県 2017『愛知県史』資料編5 考古5 鎌倉～江戸
- 愛知県教育委員会 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告3（尾北地区・三河地区）』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1987『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集 土田遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1990『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 廻間遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1991『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第22集 森岡遺跡・淡州神社北遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1991『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第36集 境川遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1992『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集 勝川遺跡Ⅳ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1996『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集 大毛沖遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1997『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第74集 大縄遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2000『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集 下津北山遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2001『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集 志賀公園遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第107集 猫島遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 権現山遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2004『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第121集 志賀公園遺跡Ⅱ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2005『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 上品野遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2006『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集 島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中野郷北遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2007『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第141集 伝法寺野田遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2009『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第159集 下津新町遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2011『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集 御山寺遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2013『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第175集 下津宿遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2015『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第198集 下新田遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2016『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第203集 伝法寺野田遺跡Ⅱ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2017『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第207集 権六遺跡』
- 青木敬 2014「蹄脚円面硯Bの出現とその特質」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所 pp.24-25.
- 赤塚次郎 2001「第1編 原始 第3章 古墳時代の江南」『江南市史』本文編 江南市 pp.32-61.
- 荒井秀規 2017「評家と白鳳寺院」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社 pp.10-22.
- 池邊彌 1966『和名類聚抄郡郷名考證』吉川弘文館
- 池邊彌 1981『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館
- 一宮市教育委員会 2006『愛知県一宮市伝法寺廃寺発掘調査報告書 一宮市埋蔵文化財調査報告Ⅴ』
- 一の丸出版 1992『岩倉町史』復刻版
- 伊東孝夫・山田昌久編 2012『木の考古学－出土木製品用材データベース－』海青社

- 稲沢市教育委員会 1982『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅳ）』
- 犬山市 1983『犬山市史』史料編3 考古 古代・中世
- 茨城県教育財団 2007『茨城県教育財団文化財調査報告書第284集 村松白根遺跡2 上巻』
- 茨城県教育財団 2015『茨城県教育財団文化財調査報告書第395集 新田遺跡・上原遺跡・殿山塚』
- 岩倉市 1981『岩倉市史』資料1 近世村絵図 金石文
- 岩倉市 1985『岩倉市史』上巻
- 岩倉市教育委員会 1983『岩倉市稲荷町・大山寺町埋蔵文化財発掘調査報告』
- 岩倉市教育委員会 1991『岩倉市文化財調査報告Ⅱ 薬師堂廃寺遺跡発掘調査概報』
- 岩倉市教育委員会・アーキジオ東海 2013『花ノ木遺跡・中街道遺跡発掘調査報告書－都市計画道路北島藤岡線街路改良工事に伴う埋蔵文化財調査－』
- 臼杵市 2019「中世のサイコロ」<https://www.city.usuki.oita.jp>
- 大上周三 2006「東国集落遺跡の掘立柱建物の理解」『掘立柱・礎石建物建築の考古学 資料集』pp.23～32.
- 大塚初重 1998「総論－考古学からみたあそびと芸術－」『考古学による日本歴史12 芸術・学芸とあそび』雄山閣 pp.5～18.
- 大沼芳幸 1990「正伝寺南遺跡出土の魚網錘について－網漁業の中での位置付け－」『一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会 pp.278-300.
- 大参義一 1966「尾張出土古瓦の編年の考察」『名古屋大学文学部研究論集』第41号 pp.191-205.
- 岡部町教育委員会 1997『県史跡 中宿古代倉庫群跡復元整備報告書』
- 岡本直久 1993「消費地からみた山茶碗－遺構内共伴遺物による各生産地編年対比－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第1輯 pp.61-75.
- 岡本直久 1999「愛知県の中世墓」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第7輯 pp.1-48.
- 岡山県教育委員会 2001『岡山県埋蔵文化財調査報告154 天瀬遺跡・岡山城外堀跡』
- 小笠原好彦 2015『日本の古代宮都と文物』吉川弘文館
- 小田裕樹 2020「平城京の暮らし－娯楽と遊戯－」『奈文研第12回東京講演会 奈良の都の暮らしぶり－平城京の生活誌－』奈良文化財研究所 pp.16-19.
- 各務原市教育委員会 2005『古代の須恵器と各務原』
- 蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴 2015「五条川流域の河道変遷と岩倉の歴史景観」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号 愛知県埋蔵文化財センター pp.69-88.
- 梶原義実 2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館
- 片桐孝浩 1995「香川県出土古代陶硯についての一考察」『香川考古』第4号 香川県考古刊行会 pp.36-62.
- 勝山勝 2001「尾張の坂田寺式軒丸瓦をめぐる二・三の問題」『名古屋博物館研究紀要』第24巻 名古屋市博物館 pp.97-108.
- 加藤夏姫 2009「土馬を中心とした古代祭祀の多様性の研究－静岡県を中心として－」『國學院大學考古学資料館紀要』第25輯 國學院大學考古学資料館研究開発機構 pp.39-54.
- 角川文化振興財団編 1999『古代地名大辞典』角川書店
- 金子裕之 1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 pp.219-290.
- 川崎市教育委員会 2014『川崎市埋蔵文化財調査報告第8集 川崎市高津区橘樹官衙遺跡群の調査－橘樹郡衙跡・影向寺遺跡総括報告書〔古代編〕－』
- 岸本雅敏 2021『日本古代の塩生産と流通』吉川弘文館
- 北條猷示 1998「東畑廃寺と尾張国府・国分二寺」『榑崎彰一先生古希記念論文集』榑崎彰一先生古希記念論文集刊

- 行会 pp.121-132.
- 黒崎町教育委員会 1993『緒立C遺跡発掘調査概報』
- 考古学フォーラム 2016『尾張・勝川V 古墳から古代寺院へ』
- 小牧市教育委員会・愛知県建築部 1976『桃花台ニュータウン遺跡調査報告 小牧市篠岡古窯址群』
- 斎宮歴史博物館 1997『史跡斎宮跡 平成8年度発掘調査概報』
- 斎宮歴史博物館 1999『史跡斎宮跡 平成9年度発掘調査概報』
- 崔ゴウン 2018「古代における瓦の製作道具について－「桶巻作り」による平瓦と丸瓦の復元作業を通じて－」『竹中大工道具館研究紀要』第29号 竹中大工道具館 pp.43-64.
- 笹森健一 2007「古墳時代から奈良・平安時代の堅穴住居」『住まいの考古学』学生社 pp.97-151.
- 佐藤信 2007『古代の地方官衙と社会』山川出版社
- 佐藤信編 2017『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
- 篠崎譲治 2010『馬小屋の考古学』高志書院
- 島根県教育委員会 1979『団原遺跡発掘調査概報Ⅰ－山代郷正倉跡－』
- 島根県教育委員会 1980『団原遺跡発掘調査概報Ⅱ－山代郷正倉推定地－』
- 島根県教育委員会 1981『史跡出雲国山代郷正倉跡』
- 城ヶ谷和広 1991「古代尾張の土師器－6世紀後半から11世紀の様相－」『愛知県埋蔵文化財センター年報』2 pp.92-110.
- 条里制・古代都市研究会編 2009『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣
- 神野恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所 pp.43-64.
- 鈴鹿市考古博物館 2002『発掘された国府－東海道・東山道の国府を掘る－』
- 鈴木三男 2012「出土木製品利用樹種の時代的変遷」『木の考古学－出土木製品用材データベース－』海青社 pp.81-102.
- 鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編 2017『日本古代の道路と景観－駅家・官衙・寺－』八木書店
- 関市教育委員会 2015『関市文化財調査報告34 弥勒寺東遺跡』
- 瀬戸市教育委員会 1990『尾呂－定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997『瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告13 品野西遺跡』
- 武部真木 2006「山茶碗の用途をめぐって－摩滅痕の分析から－」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号（設立20周年記念論集）pp.99-107.
- 館野和己・和田萃 1989「平城京左京二条二坊十一・十四坪坪境小路跡」『木簡研究』第11号 木簡学会 pp.22～24.
- 立松彰 2010「伊勢湾と三河湾の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム pp.2-19.
- 田中広明 2003『地方の豪族と古代の官人』柏書房
- 田中広明 2007「地方官衙の「館」と豪族の居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』奈良文化財研究所 pp.65-88.
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 東海市教育委員会 1984『愛知県東海市 松崎貝塚第2次発掘調査報告書 付載塚森遺跡』
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2007『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 富山市教育委員会 2020『富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書』
- 豊川市教育委員会 2013『下六光寺遺跡 豊川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 豊田市教育委員会 1995『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 梅坪遺跡Ⅱ』
- 豊田市教育委員会 2003『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集 梅坪遺跡Ⅶ』
- 豊橋市教育委員会 2016『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第140集 普門寺旧境内－考古学調査編－』

- 中村浩編 1995『須恵器集成図録』第1巻 近畿編Ⅰ 雄山閣出版
- 永井邦仁 2016「梅坪遺跡における古代集落の再検討」『豊田市史研究』第7号 豊田市 pp.169-202.
- 名古屋市博物館 1992『和名類聚抄』（名古屋市博物館資料叢書Ⅱ）
- 奈良国立文化財研究所 1981『奈良国立文化財研究所史料17 平城宮木簡3』
- 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1983『埋蔵文化財ニュース』41
- 奈良文化財研究所 2002『銚帯をめぐる諸問題』
- 奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡Ⅱ－遺物・遺跡編－』
- 奈良文化財研究所 2005『地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－』
- 奈良文化財研究所 2006『奈良文化財研究所史料77 平城京出土陶硯集成1』
- 奈良文化財研究所 2007『奈良文化財研究所史料80 平城京出土陶硯集成2』
- 奈良文化財研究所 2008『飛鳥白鳳の瓦づくりⅪ－藤原宮式軒瓦の展開－』
- 奈良文化財研究所 2014『奈良文化財研究所紀要2014』
- 奈良文化財研究所 2017『奈良文化財研究所学報第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』
- 南山大学大学院・西春町弥勒寺御申塚遺跡発掘調査会1998『弥勒寺御申塚遺跡発掘調査報告書』
- 西口壽生 2003「畿内における陶硯の出現と普及－飛鳥藤原地域出土資料を中心として－」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所 pp.9-42.
- 西口壽生 2010「東海産の陶硯について－蹄脚円面硯・宝珠硯を中心に－」『奈良文化財研究所紀要2010』奈良文化財研究所 pp.60-61.
- 浜松市教育委員会 1977『伊場遺跡発掘調査報告書第2冊 伊場遺跡遺構編』
- 浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡発掘調査報告書第12冊 伊場遺跡総括編』
- 樋上昇 2012「東海・中部－三重県・岐阜県・愛知県・静岡県－」『木の考古学－出土木製品用材データベース－』海青社 pp.193-209.
- 平川南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 福島好和 1971「古代諸国貢納水産物の分布について－その歴史地理学的考察－」『人文地理』第23巻第5号 人文地理学会 pp.29-59.
- 藤澤良祐 1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』 pp.1-52.
- 藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』 pp.19-245.
- 増川宏一 1992『ものと人間の文化史70 さいころ』法政大学出版局
- 増川宏一 2006『ものと人間の文化史134 遊戯』法政大学出版局
- 三重県埋蔵文化財センター 1992『三重県埋蔵文化財センター通信みえ』No.7
- 三重県埋蔵文化財センター 2006『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う六大B遺跡（B～I地区）発掘調査報告書』
- 水野正好 1983「馬・馬・馬－その語りの考古学－」『文化財学報』第2集 奈良大学文学部文化財学科 pp.23-43.
- 三辻利一・岡本直久 1995「山茶碗の流通－第3・4型式を中心として－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯 pp.1-41.
- 森泰通 2010「東海地方における古代土器製塩覚え書き2009－内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために－」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム pp.54-73.
- 安岡早穂 2018「土鍾からみた瀬戸内海周辺における網漁の選択性（予察）」『大阪歴史博物館研究紀要』第16号 大阪歴史博物館 pp.65-74.

山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 pp.279-297.

山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

山村信榮 1998「あそびの世界」『考古学による日本歴史12 芸術・学芸とあそび』雄山閣 pp.162～173.

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもだみなみいせきはつくつちようさほうこくしょ							
書 名	下田南遺跡発掘調査報告書 本文編、実測図版編 (1)・(2)、主要遺構一覧表・遺物観察表編、写真図版編							
副書名	川井野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山内宏之、平松久和（岩倉市教育委員会） 基峰修、小島宏貴、三島ゆかり、後藤泰志、首藤有里、後藤秀夫（株式会社アーキジオ） 森将志、竹原弘展、伊藤茂、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、Zaur Lomtadidze、小林克也、 バンダリ スタルシャン、三谷智広、藤根久（株式会社パレオ・ラボ）、森勇一（東海シニア自然大学）							
編集機関	株式会社アーキジオ中日本支店							
所在地	〒463-0021 愛知県名古屋市守山区大森1-2701 TEL052-799-8751							
発行機関	岩倉市教育委員会							
所在地	〒482-8686 愛知県岩倉市栄町一丁目66 TEL0587-66-1111							
発行年月日	西暦2023年 3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
しもだみなみ いせき 下田南遺跡	あいちけん いわくらし 愛知県岩倉市 かわいちょう 川井町	232289	110055	35度 26分 48秒	136度 85分 42秒	20190826 ～ 20210331	43,186㎡	工業用地開発
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下田南遺跡	集落跡 官衙跡	古墳、 飛鳥、 奈良、 平安、 鎌倉、 室町	掘立柱建物 竪穴建物 土坑 溝 竪穴状遺構 道路状遺構 ピット 不明遺構		須恵器 坏・蓋・鉢・ 壺・甕・円面硯、土 師器 坏・埴・甕、灰 釉陶器、山茶碗、製 塩土器、軒丸瓦、平 瓦、土錘、羽口、玉 類、巡方（石帯）、サイ コロ、ウマ歯		1b区・Ra区で飛鳥～奈良時代にか けての総柱構造の掘立柱建物群、1c 区で四面廂付建物（1c区SB007）・1d 区で一辺約13mの大型竪穴建物（1d 区SI609）等が確認できた。建物の 柱穴からは礎板が出土した。2a区2 面SD166は2b区・Rd区・Rf区に 続く溝で、多量の土師器甕等の土 器が出土した。1c区・1d区・2b 区から円面硯3点、2c区から巡方 （石帯）1点、Rg区から軒丸瓦1 点出土した。	
要 約	下田南遺跡は、五条川右岸の自然堤防上に形成された古墳時代、飛鳥～平安時代、鎌倉・室町時代の集落遺跡で、飛鳥～奈良時代の官衙遺跡でもある。 本調査（1a～1e区・2a～2e区・Ra～Rg区）では、総柱構造を含めた掘立柱建物、竪穴建物（うち1棟は一辺約13mの大型竪穴建物）、土坑、竪穴状遺構、道路状遺構、溝、ピット等の遺構が確認できた。 遺物は、古墳時代の土師器台付甕や埴等、飛鳥～平安時代の須恵器 坏・蓋・鉢・壺・甕・円面硯、土師器 坏・甕、灰釉陶器、製塩土器、羽口、土錘、瓦（軒丸瓦・平瓦）、勾玉等の玉類、巡方（石帯）等、鎌倉・室町時代の山茶碗・土師器甕・サイコロ・ウマ歯等が出土した。須恵器や山茶碗の坏類を中心に、墨書土器が17点確認できた。 出土遺物から遺構の年代は、概ね弥生～古墳時代中期（Ⅰ期・2～4世紀、Ⅱ期・5世紀）、古墳時代後期～奈良時代前半（Ⅲ期・6世紀～7世紀中頃、Ⅳ期・7世紀後半～8世紀中頃）、奈良時代後半～平安時代（Ⅴ期・8世紀後半～9世紀初頭、Ⅵ期・10～12世紀）、鎌倉・室町時代（Ⅶ期・13世紀、Ⅷ期・14～15世紀）のⅠ～Ⅷの時期に細分でき、集落の変遷過程が明らかになった。特にⅣ期では官衙遺跡としての実態が明らかになり、本遺跡の西側に位置する薬師堂廃寺跡出土の軒丸瓦と同汜瓦が出土したことも含めてその関連が窺い知れる。さらに、調査区南端で近代以前の旧五条川と推定される自然流路の存在が明らかになった。							

下田南遺跡発掘調査報告書

－川井野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

本文編

発行日	2023（令和5）年3月21日
編集・発行	岩倉市教育委員会生涯学習課 〒482-8686 愛知県岩倉市栄町一丁目66番地 TEL 0587-66-1111 株式会社アーキジオ中日本支店 〒463-0021 愛知県名古屋市守山区大森一丁目2701番地 TEL 052-799-8751
印刷	株式会社 トーザワ